

第2章

日本青年中国派遣

行 動 地 図

行 動 記 録

訪 問 先 一 覧

団 長 報 告

参加青年代表報告

意 見 交 換 成 果



行動地図

令和元年度 日本青年中国派遣



行 動 記 録

令和元年度 日本青年中国派遣

	月日	時間	行動日程	滞在都市
1	10月29日 (火)	9:05 12:00 14:45-16:10 18:40-20:50	東京(羽田)発(NH961) 北京首都国際空港着 「史家胡同博物館」視察及びコミュニティ・ユース・クラブと交流 中華全国青年連合会主催歓迎夕食会	東京 北京
2	10月30日 (水)	9:00-9:50 10:00-11:40 11:40-12:00 12:20-13:30 14:30-16:00 16:10-17:30 17:30-18:30 18:30-19:50 20:20	中華全国青年連合会表敬訪問 専門家による講義(新しい時代における日中関係について) ・質疑応答 昼食 「中関村創業大街(Z-Inno Way)」(中関村起業ストリート:中国国内で有名なイノベーションサービスプラットフォーム)の視察 ・Global Incubation Gallery ・人工知能体験センター 「北京大学グローバル大学生創業イノベーションセンター(PKU Innovation park)」視察及び交流 移動(バス内で団員感想共有) 夕食 ホテル着	
3	10月31日 (木)	9:00 9:10-9:30 9:50-10:40 11:00-11:50 12:10-13:00 13:20-14:00 14:00-15:30 15:30-16:20 16:30-16:50 17:20-19:20 20:00	北京語言大学にて日中青年交流活動 ・日中双方の代表者による挨拶 ・基調講演「私の中国での勉強と生活の日々」 北京語言大学日本語学科講師 ・日中青年友好交流体験談(中国側、日本側各3名ずつ) ・昼食 ・アイスブレイク ・グループディスカッション(ポスター作成) テーマ1:世界貿易保護主義が台頭する中の中国と日本 テーマ2:結婚観 テーマ3:青年の就業・起業 テーマ4:キャッシュレス社会 テーマ5:SDGs(国連持続可能な開発目標)の目標5 「男女平等(Gender Equality)」における青年の責任 ・グループ毎発表 ・総括 夕食 ホテル着	
4	11月1日 (金)	9:20-10:20 10:50-12:00 12:10-14:00 15:40 19:00 20:10-22:00	故宮博物院視察 在中華人民共和国日本国大使館表敬訪問 中国国際青年交流センターにて中国食文化体験及び昼食 北京西駅発(高速鉄道G505号)で河南省へ 鄭州東駅着 河南省青年連合会主催歓迎夕食会	鄭州
5	11月2日 (土)	9:00-10:00 10:00	ホームステイマッチング 終日ホームステイ	
6	11月3日 (日)	19:00 19:00-21:20	終日ホームステイ ホテル着 ホストファミリーとの交流夕食会	

	月日	時間	行動日程	滞在都市
7	11月4日 (月)	10:00-11:20 11:20-12:00 12:50-13:30 13:40-16:00 16:10-17:20 17:20-18:30 18:30-20:10 20:20-21:30 22:20	鄭州航空港經濟綜合実験区視察 ・日中交流座談会 昼食 河南省洛陽市へ移動(バス) 洛邑古城(洛陽老城歴史文化古街)及び「青年の家」(ユースハブ)視察 ・「青年の家」にて剪紙体験 ・夕食 ・夜の洛邑古城見学 ホテル着	鄭州 ↓ 洛陽
8	11月5日 (火)	9:40-12:00 12:10-13:30 14:10-16:20 16:20-18:40 18:40-20:20 20:40	河南科技大学訪問 ・大学資料館見学 ・大学イノベーション基地見学 ・食品生物エンジニアリング学院見学 ・大学生サークル活動体験(【河洛風】レーシングカーチーム) 昼食 「龍門石窟」見学 移動(バス内で団員感想共有) 夕食 ホテル着	鄭州 ↓ 鄭州
9	11月6日 (水)	8:10 10:00 11:20 12:40 12:50-15:00 15:30-17:30 18:10	鄭州発(CZ3839) 杭州蕭山國際空港着 昼食 ホテル着 自由時間 「滴水公益(Dishui Commonweal)」(民間慈善家組織)見学 夕食	杭州 ↓ 杭州
10	11月7日 (木)	9:50-11:10 11:20-12:20 12:40-13:20 13:40-14:30 15:00-15:50 16:50-18:00 18:00-19:10 19:40	「杭州芸福堂茶業有限公司」見学 「網易集团(ネットイース)」見学 昼食 「杭州城市規画館(杭州都市計画館)」見学 「吉利集团」見学 遊覧船で「西湖」見学 夕食 ホテル着	
11	11月8日 (金)	9:10-9:40 10:00-11:30 11:30-12:00 12:50-13:40 14:00-15:10 15:10-17:10 18:00 18:30-20:30	浙江工業大学(屏峰キャンパス)訪問 ・大学資料館見学 ・グループ別座談会(4グループ) テーマ1:青年の就業・起業(2グループ) テーマ2:キャッシュレス社会(2グループ) ・全体共有 昼食 「京杭大運河博物館」見学 無形文化遺産「拱宸橋(キョウシンパン)」(橋西歴史街区)訪問(徒歩) 「手工芸活態館」見学及び無形文化遺産工芸(刻印)の体験 ホテル着 浙江省青年連合会主催送別夕食会	
12	11月9日 (土)	8:30-10:00 13:50 17:50	自由時間 杭州発(NH930) 東京(成田)着	東京 ↓ 東京

訪 問 先 一 覧

令和元年度 日本青年中国派遣

10月29日

史家胡同博物館

訪問先都市	北京
面 会 者	史家胡同コミュニティボランティア
訪 問 概 要	史家胡同博物館は、数多くの中国の政治家や文化人が生活をしていた居住地やその生活の様子について紹介している博物館である。史家胡同コミュニティボランティアの方の案内を聞いたことで、中国の建築の特徴や文化大革命期の中国人の生活の様子について理解を深めることができ、中国の歩んできた壮大な歴史の風を感じることが出来た。

中華全国青年連合会主催歓迎夕食会

訪問先都市	北京
面 会 者	馬興民（Ma Xingmin）中国国際青年交流センター主任 洪桂梅（Hong Guimei）中国国際青年交流センター副主任（今年度招へい団団長） 孟洋（Meng Yang）中華全国青年連合会国際部執行部長 中国国際青年交流センター総務部副部長（今年度招へい団団員） 北京市昌平区文創会影視分会執行秘書長（今年度招へい団団員） 北京外国語大学日本社会文化協会碩士研究生（今年度招へい団団員） 中国国際青年交流センター部長 中国国際青年交流センター公益合作部科長（今年度招へい団団員） 渡邊倫幸 在中華人民共和国日本国大使館一等書記官
訪 問 概 要	21世紀飯店宴会場にて中華全国青年連合会主催の歓迎夕食会が開催された。中国側、日本側の参加者の紹介の後、馬主任の挨拶・乾杯、樋谷団長の挨拶・乾杯があった。その後には、日本文化紹介として団員が作成した手作りの日本の観光地に関するビデオ上映、空手の演武を行い、そして団員全員で「東京五輪音頭」を披露した。特に空手の演武は中国の方に人気があり、空手をはじめとした日本の文化が広く受け入れられたことに日本青年として喜びを感じた。

10月30日

中華全国青年連合会表敬訪問

訪問先都市	北京
面 会 者	奇巴図（Qi Batu）中華全国青年連合会副主席 董霞（Dong Xia）中華全国青年連合会副秘書長 孟洋（Meng Yang）中華全国青年連合会国際部執行部長
訪 問 概 要	奇副主席・樋谷団長双方の挨拶で、長年の日中の青年交流の歴史におけるお互いが果たした役割の大きさについて、感謝の意を伝えた。挨拶の中でも、副主席からの、プログラムにおける視察と青年交流を通して、中国について理解を深めてほしいという言葉が印象的で、それ以降の訪問国活動に向けて気が引き締まった。

張季風中国社会科学院日本研究所副所長講義

訪問先都市	北京
面 会 者	張季風 (Zhang Jifeng) 中国社会科学院日本研究所副所長
訪 問 概 要	日中経済関係史を1949年～1971年、1972年～1977年、1978年～2000年、2001年～2008年、2009年～の5つのブロックにわけて、それぞれの特徴について解説して下さった。日中の相互貿易が日中関係の基盤で、相互投資が関係の深まりを促すことを説明された。また日中関係が良い方向に進むのではないかという予測についてもご教授いただき、今後私たちが行っていく日中交流に向けて希望を持つことが出来た。

中関村創業大街 (Z-Inno Way) 視察及び交流

訪問先都市	北京
面 会 者	全球孵化業務部国際孵化専員
訪 問 概 要	北京大学や清華大学がある海淀区にはスタートアップ企業が集積している。それら企業のハブの役割を果たしているのが中関村である。中関村はスタートアップ企業を支援する国営会社で、企業にオフィスに加え、無料で水道と電気、インターネットを提供している。求人サービスLagooやAIサービスのFace++は中関村発の企業だ。さらに、中関村スタートアップ企業のためにトレーニングをしたり、プロモーションをしたり、成長を促したり、企業同士をつなげたり、展示の場を設けたりしている。中国がいかに積極的にスタートアップ企業の支援を行っているのかを実感した。

10月31日

北京語言大学

訪問先都市	北京
面 会 者	梁清 (Liang Qing) 北京語言大学外国語学部党委書記 孫佳音 (Sun Jiayin) 北京語言大学外国語学院日本語学科副教授 楊峻 (Yang Jun) 北京語言大学東方語言文化学院副院長 北京語言大学東方語言文化学院日本語学科・日本語教師
訪 問 概 要	午前中から夕方にかけて北京語言大学を訪問した。梁清書記、樋谷団長双方の挨拶を行った後、基調講演が行われた。自らの可能性を信じて日中友好のために尽力する西田先生のお言葉に非常に感銘を受けた。その後、日中それぞれ3名の青年による日中友好交流体験談を聞いた。午後からは5つのテーマに分かれてグループディスカッションを行った。日中の文化を比較したり、互いの価値観を共有したりすることで、それまで以上にお互いの事を理解できたと感じ、とても有意義な時間となった。

11月1日

故宮博物院

訪問先都市	北京
訪 問 概 要	故宮は明、清の時代の24人の皇帝の住居であり、明の時代には9000人の宮女、10万人の宦官が暮らしていたと言われている。故宮の四面に城門があり、ガイドさんの案内のもと、南の午門から入場し、北の神武門まで散策した。中国史の表舞台を訪れることができ、中国のその長い歴史を肌で感じる事が出来た。

在中華人民共和国日本国大使館表敬訪問

訪問先都市	北京
面 会 者	堤尚広 在中華人民共和国日本国大使館公使、広報文化部長 渡邊倫幸 在中華人民共和国日本国大使館一等書記官
訪 問 概 要	大使館では、堤公使との質疑応答の時間が設けられた。青年からは、中国の強みや訪中を通して私たちにしてほしいこと、そして中国の抱える問題点などについての質問がなされた。それに対する回答は、中国の強みとして最先端の技術が大胆に用いられることで自由競争が促進されているということ、訪問中にしてほしいこととしては情報の発信だけではなく、中国を発見し、日本を代表しているという自覚を持ちながら日本を知ってもらうために日本を表現するという目標を回答としていただいた。また中国の抱える問題点としては環境問題のことを挙げられていた。こういった公使からの激励、回答は、私たちの訪中の目的を再認識することにつながり、それ以降の訪問先に向けて一段と気を引き締めなければならないことを実感させた。その後、大使館内の日本文化紹介スペースを各自見学し、これまであまりなじみのなかった大使館の役割について垣間見ることができた。

中国国際青年交流センター

訪問先都市	北京
面 会 者	洪桂梅 (Hong Guimei) 中国国際青年交流センター副主任（招へい団団長） 李銀川 (Li Yinchuan) 共青团四川省委員会權益部部長（今年度招へい団団員） 北京緑創公益基金会秘書長（今年度招へい団団員）
訪 問 概 要	中国国際青年交流センターにて、中国の伝統的な料理である水餃子作りを体験した。中国人参加者から餃子の包み方を一から教えてもらい、中国の食文化を体感することができたと同時に、参加者同士が積極的に交流を深めることができた。今回、初めて中国の伝統的な水餃子を作り、包み方が日本とは違ったり、タレも違ったりと多くの相違点がありとても驚いた。また、日本では焼き餃子が主流であるが、中国では水餃子が主流であるが故に、包み方やタレが異なってくるのではないかと感じた。中国の家庭では、皮から作るのが普通であるという事を聞き、日本で餃子を作るときにも皮から作ってみたいと感じた。

河南省青年連合会主催歓迎夕食会

訪問先都市	鄭州
面 会 者	武皓 (Wu Hao) 河南省青年連合会主席 邵新軍 (Shao Xinjun) 河南省青年連合会副主席 李花 (Li Hua) 河南省青年連合会副主席 韓冰 (Han Bing) 河南省青年連合会秘書長 河南省青年連合会委員 好想你健康食品株式会社投資創新センター総経理（今年度招へい団団員） 河南省青年企業家協会副会長 鄭州優埃富欧科技創新有限公司創始者CEO（今年度招へい団団員）
訪 問 概 要	河南省青年連合会主催の歓迎夕食会が開催された。武皓主席の歓迎の挨拶及び槌谷団長の挨拶の後、盛大な乾杯が行われた。会場の円卓には中国人参加者と団員が同席し、中国語や英語を介して交流を楽しむことができた。歓迎会には、翌日から始まるホームステイ先のホストファミリーが参加しており、各団員はホストファミリーと初対面することもでき、次の日から始まるホームステイへの期待が高まった歓迎会であった。

11月2～3日

ホームステイ

訪問先都市	鄭州
訪問概要	団員2人1組でホストファミリーの家に訪問し、1泊2日のホームステイを行った。ホームステイ中は、近郊の市場を訪れ買い物をしたり、一緒に中国の家庭料理を作るなど中国の日常生活に触れ、日本の文化との比較ができた。また、少林寺で演舞を見たり、暢泳中原福塔などを訪れることで中国の歴史や最新技術を学び、より深く中国について学ぶことができた。

11月3日

ホストファミリーとの交流夕食会

訪問先都市	鄭州
面会者	韓氷 (Han Bing) 河南省青年連合会秘書長
訪問概要	始めに、日中両国が自国の伝統文化を紹介し、お互いの文化についての理解をより深めることができた。具体的には日本側から歌と空手、そして福笑いを紹介し、中国側からは伝統的な歌や踊り、太極拳、そしてマジックなどが披露された。特に、初めて見る太極拳には、団員一同感動していた。また、交流夕食会の最後には団員とホームステイ先の方々と共に「朋友」を歌い、絆を深めることができ、お互いに別れを惜しんでいた。

11月4日

鄭州航空港経済総合実験区

訪問先都市	鄭州
面会者	孔凡彪 (Kong Fanbiao) 共産党青年団工作委員会書記 張雨林 (Zhang Yulin) 商務局外橋処処長
訪問概要	鄭州中心部から約25キロ離れた鄭州国際空港周辺における開発の現状について詳しくお話を聞くことができた。実験区は415万平方メートルであり、まだ開発計画中であるが、すでにスマートフォン製造企業が30社入っている等、めざましい発展を遂げている地域である。また中国の大きな政策である「一帯一路」の取り組みの一環であるという話もあり、中国の世界戦略を垣間見ることができた。

洛邑古城

訪問先都市	洛陽
面会者	朱蕾 (Zhu Lei) 洛陽市青年連合会副主席 宋君毅 (Song Junyi) 洛陽市青年連合会秘書長 洛陽市老城区 (旧市街) 青年連合会主席
訪問概要	洛邑古城は、中国料理の屋台や雑貨店が立ち並び、洛陽の昔ながらの街並みが再現されている。視察では、唐代の陶器である唐三彩等、洛陽の無形文化遺産の紹介がされた。青年の家では、中国の伝統工芸品である剪纸の体験をした。剪纸は、結婚、出産、葬式等の人生の節目の時に使用する装飾品として、現在もなお使用されている。剪纸の体験は細かい作業で団員たちも苦戦したが、集中して作成し完成したものを見せ合って楽しい時間を過ごした。夕食後は、各自で洛邑古城を散策した。夜の洛邑古城は様々な色のライトで華々しくライトアップされていて、感動的な景色だった。

11月5日

河南科技大学

訪問先都市	洛陽
面 会 者	李継光 (Li Jiguang) 河南科技大学団委副書記
訪 問 概 要	1952年設立の洛陽工学院を前身に持つ総合大学で、企業との共同研究が活発なことも特徴である。31の学部、95の専攻を提供している。またそのうちの28学科は河南省の重点学科に指定されている。大学資料館では、大学の歴史が、写真や展示物で詳細に説明されていた。その後、学生が自由にロボットを試作できるロボットセンターを訪れ、そこでは食事配膳ロボットや、砂糖でアートをするロボット、ルービックキューブの色を高速で揃えるロボットを見学し、その創造的な研究環境に魅力を感じた。また食品に関する研究施設も見学し、大学で醸造しているというワインや学生の作ったお菓子を頂いた。最後に、河洛風という大学のレーシングチームと交流した。河洛風は2011年4月に設立され、2017年には中国の学生大会で2位になるなど、輝かしい成績を収めている。

龍門石窟

訪問先都市	洛陽
訪 問 概 要	龍門石窟は河南省にある石窟寺院で、2000年に世界遺産に登録された。1500年ほど前から建設が開始され、無数の石窟が南北1キロメートルの断崖絶壁に並んでいる。高さ17メートルから2センチのものまで10万體以上も納められている。特に最後に見たガイドさん曰く龍門石窟の山場である、非常に大きな石像が並ぶ場所はとても迫力があつた。その迫力に圧倒され、心に残る景色であつた。過去の盗難が原因で、石像には顔のないものが数多く存在している。一方で雨によって自然に削れていった石像もあり、1500年という時の流れをしみじみと感じた。

11月6日

滴水公益 (Dishui Commonweal)

訪問先都市	杭州
面 会 者	活動紹介員
訪 問 概 要	中国の民間慈善家組織である滴水公益に訪れ、中国におけるボランティアの制度や活動内容について学ぶことができた。滴水公益は47の都市及び地域で活動をしており、学習支援や環境保護など様々な分野で活動している。日本とはまた違う形のボランティアの取り組みはとても関心深かった。

11月7日

杭州芸福堂茶業有限公司

訪問先都市	杭州
面 会 者	宣伝部部長 行政部總監 行政部
訪 問 概 要	2008年に李曉軍が大学在学時に創業した、主にお茶の製造と販売を行っている企業である。昨年の売り上げは約40億円であり、大学生が起業した企業としては中国一の納税額を誇っている。茶葉の他には茶器の製造や広告制作、および生放送での宣伝も行っている。芸福堂は数多くのオンラインショップサイトと提携しており、インターネットを活用した販路拡大を続けていることを知り、現代社会におけるオンライン市場の重要性を再認識することができた。

網易 NetEase

訪問先都市	杭州
面 会 者	雷火遊戯UX部門総監 雷火遊戯UX部門総監 雷火遊戯高級ユーザー研究員
訪 問 概 要	デジタルカルチャー、オンラインショッピングおよびデジタルインフォメーションなどデジタル事業を展開している企業である。ゲーム事業が収益のメインであり、2018年にはグローバルゲーム会社収益ランキングで世界第7位という成績を取っている。従業員の平均年齢が28歳であり、日本にも展開しているという話もあり、私たちと同世代の青年が世界を股にかけ活躍しているということに刺激を受けた。

杭州城市規画館

訪問先都市	杭州
面 会 者	杭州共青団市委員会統一戦線部部长補佐 解説員
訪 問 概 要	杭州は中国7大古都のうちのひとつであり、その絵のような景観で、人間の天国と称されている。そのような由緒正しい歴史を持つ杭州の町の成り立ちや近年の成長、都市計画などについて映像や模型を用いて説明している。特に数年前と現在の比較を紹介している映像では、これが同じ街なのかと感ずるほど大きく変化しており、中国の成長を感じることができた。

吉利集団

訪問先都市	杭州
面 会 者	総工程師（今年度招へい団員） 新聞公関部総監 銷售部高級專員
訪 問 概 要	吉利グループは、①吉利自動車グループ、②ボルボ自動車グループ、③吉利科技グループ、④吉利新エネルギー商用車グループ、⑤銘泰グループの5つのグループに分けられ、従業員数は約12万人、その内外国人従業員は4.2万人である。今回の訪問では吉利グループの沿革や、自動車の紹介、そして最新のラインナップなどについて説明を受けた。特に人の声に反応する、Wi-Fi機能を備えた自動車の最新技術に感銘を受けた。

西湖

訪問先都市	杭州
訪 問 概 要	西湖という名前の湖は中国国内に30カ所以上あるが、最も著名なものであり、世界文化遺産に登録されている。西湖の面積は6.03km ² 、水深は平均約1.5メートルと比較的浅い湖だ。杭州の西湖は中国版のロミオとジュリエットである、梁山泊の物語の舞台であり、幻想的な雰囲気の漂う場所である。最近杭州で行われたG20サミットに参加した安倍首相も西湖を訪れている。

11月8日

浙江工業大学

訪問先都市	杭州
面 会 者	浙江省青年連合会 浙江工業大学共青团委員会副書記
訪 問 概 要	1910年の設立当初は浙江中等工業学院という学名であり、2004年までに4つのキャンパスが作られた。大学資料館には実際の卒業証書や教科書が展示されており、当時の空気感をよく感じられるものであった。学生とのグループディスカッションは2テーマに分かれて行った。1つは青年の就業と起業、もう1つはキャッシュレス社会についてである。中国と日本は近隣の国であるにもかかわらず、制度や法律の違いもあったが共通な点もあった。例えば、日本も中国も起業する人よりも就業する人が多かったり自分の興味に合わせて将来を決めたりすることである。そして、キャッシュレス社会における議論では中国も日本もキャッシュレスを推奨していることは同じであった。しかしながら、中国においては現金を持つ人はほとんどおらずキャッシュレスで全てのことをできる。日本ではまだ現金を使う人も多く、中国ほど発展してないと考えた。今回の意見交換では双方のことについて話し合うことが出来、短い時間であったがとても有意義な時間になったと思う。

京杭大運河博物館見学及び拱宸橋（キョウシンバシ）訪問

訪問先都市	杭州
訪 問 概 要	大運河博物館は2006年に開館したもので、かつての遣唐使も利用したという杭州から北京や西安といった中国の都をつないでいた運河を中心に据えて、中国史について詳細に説明しており、大変興味深いものだった。またそこには運河に関する歴史だけでなく、一般から集めた絵の風刺画や船の商人に関する展示物も多く飾られており、市民の生活に運河がとても身近な存在であることを感じた。その後訪れた拱宸橋は2014年にはユネスコ世界文化遺産に登録されたもので、先ほどの運河の上に架かっているものである。この橋には2つの役割が存在し、1つは人々の日常的な道で交通手段であり、もう1つは税関としての役割である。このように経済的役割を担いつつ、怪しいものを町の中に持ち込ませないという軍事的役割も果たしていたとのことであった。そして橋を実際に渡ると、そこには清末期から中華民国にかけた時代の建物が残っており、当時の活気のある様子を思い起こすことが出来た。

手工芸活態館及び無形文化遺産工芸体験

訪問先都市	杭州
訪 問 概 要	四大国石には青田石や之昌化石があり、今回の体験では青田石を用いて、刻印体験を行った。他にも石には多くの歴史があり、面白いと感じた。工芸体験では、石だけでなく他にも必要な器具があり、それらにも歴史が多く存在している。団員は、無形文化遺産工芸品の体験に緊張しながらも興味を示しながら集中して取り組んでいた。それぞれの特色のある物が出来上がり、とても貴重な体験が出来たとともに充実した時間になった。

浙江省青年連合会主催送別夕食会	
訪問先都市	杭州
面 会 者	王慧琳（Wang Huilin）浙江省青年連合会主席 王輝球（Wang Huiqiu）浙江省青年連合会秘書長 朱劍（Zhu Jian）浙江省青年連合会副秘書長 蔣成（Jiang Cheng）浙江省青年連合会副秘書長 景麗敏（Jing Limin）浙江省青年連合会副秘書長 杭州花家山莊営業部副經理（今年度招へい団員）
訪 問 概 要	浙江省青年連合会主催で、浙江省への歓迎も兼ねた送別夕食会が行われた。中国側からは伝統的な歌が披露され、日本側からは空手、東京五輪音頭、世界に一つだけの花と朋友を披露した。特に歌を歌っていた時には、日本側と中国側が一体になったような感じがした。2週間の研修の最終日ということもあり、少し寂しさを感じるとともに中国への愛が高まっていった。そして全体に一体感が生まれてきたように感じた。

令和使節団「デジタル・シルクロード」の旅

樋 谷 裕 司

1. 旅のはじまり

2019年は、令和の新時代、中華人民共和国建国70周年という日中双方にとって大きな節目の年である。特に6月のG20大阪サミットに際しては、安倍晋三総理と習近平主席の間で、日中関係が正常な軌道に戻り、

「日中新時代」を切り開いていく決意が共有されるとともに、イノベーションや知的財産保護、省エネ・環境、観光交流などの潜在力のある分野において互恵的な実務協力を強化することや「日中青少年交流推進年」を積極的に進めていくことなどについて一致した。この記念すべき年に、私たちが、日本青年を代表する親善交流活動に参加できることは、誠に有難く、また、身の引き締まる思いがした。

私の中国体験は、20年余り前に北京・上海を出張で訪れて以来である。このとき、街中に建築用のクレーンが林立する風景を見たが、現在の中国はどのような発展を遂げているのであろうか。また、これまで携わってきた仕事との関りで産業のエコシステムの創出に関心があるが、悠久の歴史を持つ各地方都市が、この20年余りで革新的な発展を成し遂げた要因は何か。次代を担う日本の青年たちと共に学べる幸せに心はずんだ。

2. 団目標は「心和心」

私たち第41回派遣団が、7月初旬の事前研修期間中に決めた交流活動の目標・テーマは、「心和心」であった。これは、互いの心と心が触れ合う真の意味での交流から新たな未来が開かれるとの想いを表わしたものであり、「人々が美しい心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められた新元号・令和にもちなんでいる。中国の人たちにも多言を要せず伝わるなかなか良い団目標・テーマであったと思う。

古来、日中の交流から生まれた生活文化は数限りないが、日本の漢字文化を例にとると、仮名文字の発明というイノベーションによって、誰もが使えるコミュニケーション・ツールが出現した。例えて言えば古代版のSNSであるが、これが日本最古の歌集「万葉集」の編纂につながっていった。およそ千三百年前に完成した万葉集には、天皇や貴族だけでなく、農民や兵士の妻など幅

広い階層の人々が詠んだ4千5百首もの歌が収録されており、その名のとおり万世（葉）に伝わり、新元号「令和」の出典にもなった。訪問先での団長あいさつでは、こうした逸話を紹介しつつ、令和新時代をアピールし、また文化交流の大切さを訴えた。

事前研修の五日間を振り返ると、まず、経験や考えも違う個人が、同じ釜の飯を食い、団目標・テーマの論議などを通じて、相互に刺激し合い、団としてのまとまりや共同体意識を築くことができた。団目標・テーマには様々なアイディアが出され、渉外の助言を受けながら甲論乙駁、最後までなかなか決まらなかったが、プロセスが大事と考え、あえて決定は急がなかった。

次に、世界第2位の経済大国・中国の産業のイノベーション、コミュニティの現状を、専門家による講義などの座学で知る中で、団員たちは中国の経済社会に関する探求心を大いに刺激した。はじめは漠然としていた交流活動と自分自身とのつながりも少しずつ見えてきて、「ひょっとすると人生の一つの転機になるかも知れない」と振り返った団員もいた。派遣までの自主研修期間中、アリババ関連の企業訪問に備えて日本の物流関連ビジネスの現場を見学した団員もいた。

特に、元麻布の中国大使館への訪問は、日本に在りながら中国の主権が及ぶ領域に足を踏み入れ、異文化を体験できたという意味において貴重であった。青年交流事業参加者OBでもある倪健（ニージェン）公使参事官の含蓄のある講話を聴き、「人と人との関係が良くなれば国と国の関係も良くなる」という道理を知り、友人づくりのツールとして、中国版「LINE」＝「WeChat」のご紹介もいただいた。大使館訪問のわずか2時間後には、G20における日中の首脳動きを伝える公式Twitterの次の記事に私たちの動画がアップされたのである。このスピード感ある対応は組織がフラット型になっているが故に相違なく、5G時代における中国の情報戦略・世界戦略の一端を垣間見る思いがした。

事前研修終了後の8月末には、安藤裕内閣府大臣政務官ご臨席の下で中国からの招聘団をお迎えし、日中の青年同士が東京や地方の訪問先において交流する機会が得られた。中国派遣の際に友人として再会できる喜びはまた格別であるので、次回以降の団員にはこの機会を積極

的に活用されるよう是非お勧めしたい。

3. 新時代を迎えた中国経済

令和元年も10月に入り、中国での建国70周年の祝賀行事や新天皇陛下の即位礼など歴史的イベントを経て、いよいよ10月29日、前日に大塚拓内閣府副大臣からいただいたあたたかい激励のお言葉を胸に、中国に向けて出発。

今回、中国側が用意した交流プログラム全体の印象を一言でいえば、新中国の建国70周年から始まる「新・新中国」ツアーであった。北京入りした翌日、中華全国青年連合会（全青連）の本部を訪問した際、中国経済の専門家・張季風氏は、講話の中で、今年から始まる日中新時代を「理性的な政熱経熱」と表現した。「世界の工場」と言われる中国は、今後更に商品・サービスの質の向上を図り、サプライチェーンの川上にある日本と「ウィンウィンの関係」を築く考えであるという。一方で、イノベーションやグリーンなど「経済の新時代」に向けた発展理念を明確にし、安定成長経済・「新常态」に対応した「質の高い生活」＝「小康」水準の目標にも取り組んでいる。特に、最近では都市部と農村との格差の解消に目を向けているとのことであった。日本が高度成長期を経て円高不況に陥り、1980年代半ばに入って「生活の質」重視、内需主導型経済への転換を図り、持続可能な成長モデルを模索した経験に照らせば、こうした方向は十分首肯できるものである。

また、65歳以上の老年人口が1.67億人となる中国では、人口高齢化への対応についての関心も高く、色々な場面で話題となった。日本の高齢者が何故元気に楽しく社会生活を行っているのか、あるいは、日本人の協調性、集団で力を発揮する国民性、社会貢献・公益活動に学びたいと考えているようだ。

私たちは、派遣期間中、北京語言大学、北京大学、河南科技大学、浙江工業大学と4大学を訪問して、団員と同年代の若者とディスカッションを行った。さらに、地方都市では洛陽や龍門石窟、杭州の西湖などの世界遺産を訪問し、悠久の歴史に触れる一方、地域特性を生かした開発が進む経済特区やインキュベーション施設、ユニコーン企業の見学などを通じて民業によるイノベーションを政府が強力に支援する仕組みについて見聞を広めた。現在の中国の経済体制はいわゆる「社会主義市場経済」であるが、特に近年は「サービス・最先端産業主導型の経済」を目指し、消費意欲の高い若年層をターゲットに政府が積極的に起業を支援している。また、社会に成功者の総取りを許す風潮があるため、中国の若者のチャレンジ精神が刺激され、「失敗を恐れない気風」が育ったのではなかろうか。

中国語にも、日本の高度成長期のサラリーマンのライ

フスタイルを思わせる「早出晩帰 披星戴月」（朝は星影を踏んで出掛け、夜は月影を背負って帰る。朝早くから夜遅くまで懸命に働くことの例え）という成語がある。滞在中、文字どおり「早出晩帰 披星戴月」のハードな日程をこなした団員たちだが、大学の廊下で自分用の腰掛けを持ち込んで必死に試験勉強の追い込みをかける学生たちの姿を見掛け、軽いカルチャー・ショックを受けた者もいたようだ。

私たちが最初に訪れた地方都市・鄭州は、かつて「中原」と言われた中華文明発祥の地である。ここでは、中国の中心に位置する地の利を生かし、陸上と航空の交通インフラが急速に整備されつつある。私たちが乗った高速鉄道G505号は、北京―鄭州間（上野―新青森間に匹敵）を約3時間で繋ぎ、驚いたことに、日本の新幹線以上に振動がなく、快適な旅であった。陸上では、「米」字型の高速鉄道網などが整備される一方、「鄭州航空港経済総合実験区」では、航空物流ハブ機能などを中核とした街づくりが進んでいる。ニューヨークのセントラルパークを模して建設が進む都市の中心部を訪れた私たちは、同空港周辺の工業団地で既にiPhoneが年間1千万台以上生産され、滑走路は5本中3本目の建設に着手しているとの説明を受けた。ここには、「空のシルクロード」の拠点の一つが形成されつつある。

4. デジタル経済の時代を考える

旅の終わりは、京杭運河の起点・杭州。春秋時代の昔から始まった大運河事業の歴史を博物館で見学し、先人の労苦がしのばれた。この運河は、約1200年前、先進的な仏教文化や技術を日本に伝え、平安京建設に貢献した空海が旅したことでも知られる。アジアの各地域の交流・交易を支え、ネットワーク化を促すインフラの役割も担っていたのだ。杭州は、鄭州と同様、近年、人口1千万人を超える巨大都市の仲間入りをし、また、短期間で世界企業に急成長したネットビジネスのアリババや吉利自動車を生み出した先進都市である。世界の市場の変化のスピードは著しく、例えば、ロンドンで走る名物タクシー・ブラックキャブの7割が中国製に置き換えられていると聞いた。

私たちが訪問したアリババ傘下のオンライン茶葉販売の芸福堂やゲームソフトで創業した網易(Net Ease)では、若者が主役となる新しい生活文化を創造し、新たな需要を喚起する現場に立ち会うことができた。この年11年目に入る「独身の日」の11月11日、アリババは1日のセールで、史上最高の4兆2千億円の売り上げを叩き出したという。驚くべきことに、楽天の年間国内EC総額（2018年度3兆4310億円）を軽く上回る規模だ。今や世界のEC市場は、まぎれもなく中国企業がけん引している。



杭州・オンライン茶葉販売「芸福堂」での集合写真
「双11」は「独身の日」を示す。

アリババCEOの張勇（ダニエル・チャン）氏は、9月下旬、Alibaba Cloudの年次イベントで、今後、世界は全面的にデジタル経済化が進み、そのエンジンは「数（データ）と智（インテリジェンス）」となると語った。消費者の行動が検知され、ビッグデータとして収集され、分析され、そこから新しい需要と供給が創出されるという。5Gネットワーク、光ケーブルなどのインフラ整備が世界的に進む中、古都・杭州を拠点に、目に見えないサイバー空間で「デジタル・シルクロード」がどのように形成されていくのか、今後も目を離せない。

ただ、「独身の日」に取引される商品・サービスの人気輸入国・地域ランキングの1位は、実は日本である。また、モバイル端末や電気自動車に欠かせないリチウムイオン電池開発の功績で、つい先頃、吉野彰氏がノーベル化学賞を受賞したように、モノづくりのコアの部分やコンテンツなどの「川上」の部分では、日本になお強みがある。問題はその持続可能性である。20歳代の団員たちは、生まれながらにして「ネット社会の原住民」である。成功体験も持たないが、同時に固定観念にも捉われていない。空海が中国に渡ったのも30歳の若さであったという。5Gネットワークのその先の時代を進取の精神で切り拓いていく「令和の空海」が現れることを是非期待したいものだ。

5. 日本の情報発信・コミュニケーション活動

私たちは、出発前、大塚拓内閣府副大臣から「一人ひとりが日本の親善大使と心得て欲しい」と激励のお言葉をいただいた。団員たちは、東京2020をアピールしたいと考え、揃いの法被で「東京五輪音頭」を踊ることを考えた。正直に言えば出発前研修のときまではどうなることかと心配もしたが、現地に入って上達のスピードは目覚ましく、最後はどこに出しても恥ずかしくないレベルでその役割を立派に果たしてくれたものと思う。また、鄭州では、太極拳の達人対東京オリンピックの新種目・空手の型の対決が実現した。圧巻は、杭州の送別会

で団員たちが歌う「世界に一つだけの花」に会場全体が一体化し、クライマックスは中国語で歌う「朋友」の合唱の輪に杭州青年連合会のトップ・王慧琳主席も加わって最高の盛り上がりとなった。

団員同士の双方向・リアルタイムのコミュニケーションや対外的な情報発信の手段は、今日やはりSNSが主流となる。しかし、中国派遣団の場合、現地派遣中における通信環境の制約（ホテルのWi-Fiパスワードの取得には中国の携帯番号の入力が要求されるなど）があるため、滞在中は、予めタブレット端末にインストールしておいたWeChatに切り替えた。WeChatは団員だけでなく、受け入れに当たってくれた中国側メンバーとのコミュニケーション手段としても大活躍したが、結局Googleなどはうまく接続せず、現地では「百度」や「百度地図」アプリをインストールして何とかしのいだ。したがって、41団としての公式の情報発信は、帰国後、全員が派遣中撮り溜めた写真をGoogleフォトで共有するとともに、新たに発足したSNS係の下で、FacebookとInstagramのアカウントを作成するところから始まった。



団員たちが作ったFacebookのQRコード

デジタル経済化が進む今日、通信・システム環境などはプラットフォーム型のサービスを受ける基礎的な条件といえる。現地入りしてからの学びを深め、現地発の情報発信を効果的に行うためにも、中国の最新の通信事情について把握した上で、SNSの活用の仕方などについて、予め団員同士で十分話し合っておく必要があるのではなかろうか。

6. 結びにかえて

今回の派遣で、団員たちにとっての最大の収穫は、報道などにより中国に対して抱いていた漠然としたマイナスイメージが払拭され、様々な側面の中国を自分の目と耳で見聞き、発見できたことであった。また、団員同士が刺激し合い、人間としての幅が広がったと感じた者も多かったようだ。

私個人は、帰国してみて、好きなサイトを閲覧して世の中の出来事を知り、品質や価格、支払い手段を選んで納得した買い物ができる生活に戻り、日本の良さを改め

て見直した。同時に中国の人々が持つハングリー精神や家族を大切にする気持ちなど、私たちが日々の暮らしの中でどこかに置き忘れてきたものにも気付かされた。今回の派遣を契機に、団員一人ひとりが、自分との関わりで一衣帯水の隣国・中国との関係を捉え、自らが進むべき道を見出すことを願っている。

おわりに、日中国交正常化後、日中両国の関係は「山あり谷あり」で様々なことがあったが、この事業が1979年に開始されて以来、絶えることなく続けてこられたのも、ひとえに内閣府と全青連の本事業に対する熱意と全面的なバックアップによるものである。ここに、改めて深く敬意と謝意を表するとともに、今回、私たちの全行程に同行し、日々きめ細かいお気遣いをいただいた中国国際青年交流センター経済協力部長 陸鉄鈞氏、公益協力部科長 崔斌氏に心から感謝申し上げ、擱筆することとしたい。

参加青年代表報告

令和元年度 日本青年中国派遣

心と心で紡いだ真の国際交流

1. はじめに

日本は2019年5月1日に令和という新しい時代がスタートし、中国は10月1日に建国70周年を迎えるという節目の年に、私は第41回日本・中国青年親善交流事業の日本参加青年として中国に派遣された。また本年は、両政府によって「日中青少年交流推進年」にも指定された年でもある。そのような特別な年に、私たちが団のテーマとして掲げたのは「心と心」である。これは中国語で、「心と心」という意味になるが、「日中両国の人々の心の中にある思いが想いとなり、日中友好にとって途切れることのない架け橋になれるように」という願いを込めた。私は帰国後にこの事業を振り返った時、個人的には、大いにそれが達成できたと感じている。そして本成果報告書では、①印象的だった体験・学んだこと、②本事業を通して成長したこと、③成果を今後どのように活かしていきたいか、という三点について以下で記述していく。

2. 印象的だった体験・学んだこと

私が本事業で特に印象的だったことは二点ある。

第一に、北京語言大学の大学生との交流である。その日のメインイベントは、「キャッシュレス社会」「青年の起業・就業」「SDGsのジェンダー平等」「結婚観」「世界貿易保護主義が台頭する中の中国と日本」をテーマとした5グループに分かれ、日本と中国の現状や問題について意見交換をすることであった。私は「結婚観」というグループで意見交換をしたが、中国人女性が結婚相手を選ぶ際に、「車と家」の有無を重要視するという話を聞き、日本との価値観の違いに驚いた。さらに、中国人女性が「女性は子育てをするためだけに生きているわけではない」と話していたことがとても印象的で、自分が今後キャリアや人生を進んでいく上で、大いに心に残る意見だと感じた。蛇足になるが、当日意見交換をする前に、各グループに分かれて昼食をとりながら雑談した時のエピソードで、“ていちゃん”という中国人の女の子と「流行していること」について話をしていた時、日本では「タピオカミルクティーが流行している」ことを伝え、彼女は「中国では一般的な飲み物だよ！」と日本

での大流行に驚いていたことがおかしかった。



北京語言大学にて大学生と意見交換

第二に、私は今年の8月に、中国から訪日した中国招へい青年の東京での歓迎会や企業訪問で事前に交流していた。そのため、北京での中華全国青年連合会による歓迎会や餃子作り、また鄭州市や杭州市を訪問した時に招へい青年と互いの近況報告ができ、それによる再会の喜びを分かち合え、より深い交流ができた。さらに、鄭州市でのホームステイ体験では、ホストファミリーが八月の訪日団の一人だったため、1泊2日という限られた時間であったが、とても有意義で濃密な時間を過ごすことができた。例えば、家から車で2時間ほどの場所にある有名な観光地である「少林寺」に連れて行ってくれた。そこでは、中にある様々なお寺を見て回ったり、修行をしている修行僧による武術のパフォーマンスを鑑賞したり、鄭州で人気の麺料理を食べた。そして最後の別れの時には「また遊びに来てね」と言ってもらえ、最初は赤の他人だったのにもかかわらず、お互いを知ったことで中国人も日本人も関係なく心で繋がれることを実感できた。再度鄭州市を訪れる際には、日本のお土産で日本の文化を紹介し、より日本に興味を持ってもらえる機会にしたいと考えている。



ホストファミリーとともに少林寺を観光

3. 本事業を通して成長したこと

私が本事業を通して成長したことは三点ある。

第一に、本事業の参加青年を含め、多様なバックグラウンドを持つ人と交流することができたことである。大学での私の交友関係は、世界の様々な国と関わることを好む同質の限られた世界の学生であった。しかし、本事業の参加青年は日本全国から参加していることもあり、彼らの出身地や住んでいる地域の話を知ると、日本人でありながら、知らない情報も多々あった。また中国においても、自分と同世代の大学生と交流する中で、お互いに自分の将来の進路についてなど、日々の疑問や悩みを相談し合い、本音で話し合えたことで、若干でも中国人の本質に触れられたのではと考えている。そのため、このような関係を一時的ではなく、今後も継続した関係にするべく、さらに中国語の勉強を頑張り、よりスムーズに自分の意見を適切な言葉で伝えられるようにしたいと考えたようになった。

第二に、今後自分が学びを深めていきたいと考えるテーマを見つけられたことである。私は大学で、国際関係学を専門に学んでいるため、様々な国の歴史や国交について学んできた。そして幼い頃に中国に住んでいた頃と昨年短期留学で訪れた同じ都市の様変わりの大きさから、漠然と中国の経済成長について興味を持っていた。しかし、中国経済の様々な数値や「爆買い」といった中国国民の行動について考察していたものの、あまり手応えのある結果は得られなかった。しかし今回「青年の起業とボランティア」という日中共通の派遣のテーマに基づいて、それに関連する様々な中国企業訪問をし、「起業」が中国の凄まじい経済成長のカギを握っていると考

えた。そこで今後はそれについてより見識を深めていきたいと考えている。

第三に、相手に対して配慮をした言葉選びの大切さである。それはこの事業を通して「質問力」が様々な場面で問われることが多く、その大切さが重視されていたからである。私は、これまで観光やボランティアなど、個人レベルの様々な国際交流に参加していたが、そこでは自分の考えや主張を相手に伝える事のみが重視されていた。しかし今回の事業に参加した私は、日本の代表青年として、様々な場面での自分の行動や言葉遣いに細心の注意を払う必要があった。これは初めての経験であり、最初は失敗することを恐れ、相手と上手くコミュニケーションをとることが難しかった。しかし、在日中国大使館への表敬訪問や「鄭州空港経済先行区」、様々な企業、そして北京語言大学や浙江工業大学など様々な場面で質問する機会があった結果、徐々にそれが身につく、最終的には自発的な交流ができるようになっていた。この「相手に不快さを感じさせず、かつ自分の疑問を解決するために適切な言葉で質問する」力は、今後様々な人と交流する時にも役に立つと考えているため、とても良い経験ができた。

4. 成果を今後どのように活かしていきたいか

私がここで得た経験を今後どのように活かしていきたいかについては、三点ある。

第一に、自分が見てきたものや得た経験を、様々な人に伝えたいと考えている。すでに学校での説明会に既参加青年として、自分の経験を発表する機会があったが、より多くの人にこの事業の良さや中国の現状について知ってもらえるよう、今後もそのような活動に積極的に参加したいと考えている。

第二に、「百聞は一見に如かず」という言葉があるが、私の周りにいる中国に興味のある友達と共に中国に行き、中国人の情に厚い部分や親切なところを肌で感じてもらえる手伝いをしたいと考えている。そして、彼らが最終的に、自分たちが交流した中国人はとても親切で、もともと持っていた中国人に対する悪い固定概念が変わる一助になりたいと考えている。

最後に、先ほど成長したことの二点目でも触れたが、今回の事業に参加したことで、漠然としていたイメージから具体的にテーマが決まったため、今後はそれが自分の納得がいくところまでテーマを深く掘り下げ、自分がこの事業で訪問した企業や中国の現状を含め、中国の経済成長と企業の関わりから何が考察できるのかを卒業論文という形でまとめ、成果を出すことを目標にしたいと考えている。

5. 終わりに

この事業を通して私は、語学力も大事ではあるが、「心と心での繋がり」の大切さを実感した。なぜなら、団員の中には、一部の観光に訪れている訪日中国人の影響から、初めは中国や中国人に対して良いイメージを持っている人はあまり多くなかったからだ。しかし今回の派遣プログラムを通し、ホストファミリーや各都市でのガイドさんやコーディネーターを始めとした様々な中国人の方々と言語だけによる交流ではなく、簡単な中国語や身振り手振りを使った「心と心」の交流で、彼らの持つ中国人の印象がガラリと変わり、私たち日本人と変わらない心の持ち主であると話していたことが私にとってとても印象的だった。それは私たちの団目標である「心和心」が体現された瞬間でもあった。このように様々な多くの学びを得られたという点からもこの事業に参加してとてもよかったと感じている。最後に、私がこの事業で多くの学びを得られたのは様々な人の支えがあったからである。その人たちに恩返しをするためにも、卒業論文や自分の今後のキャリアで活かせるよう、今後も精進していく所存である。

私の中国観、日本人の中国観

日本人の多くは中国のことについて考えるとき、どこかイメージが古かったり、先入観でとらえてしまったりすることが多いように思う。私もそんな典型的な日本人の一人であった。私は小さいころに夢中になった『三国志』やシルクロードについて書かれた『敦煌』など、文学などを通じて中国史の雄大さにこれまでずっと惹かれてきた。このため、私の中国観は雄大な歴史を抱え、文化が人々の心に息づいているというようなイメージであった。しかし一方で、どこかそういった歴史を引きずってしまっているというようなイメージがあったのは間違いないことであった。

また、中国に行くまで自分は「中国の良き理解者」であると思っていた。これは中国という日本人があまり興味を持っていない国に関心を持ち、中国語や中国に関する勉強をしていることもあり、中国に関する知識には自信があったからだ。しかし、私の知っている中国はなんと表面的で、浅いものであったのかになんと中国到着後すぐから気づかされることになった。北京空港に到着したとき、私は飛行機に乗ってものの3時間で着いてしまったことに純粋に驚いた。なぜこんな単純なことで驚いてしまったのか。それはつまり地理的には近いということを頭で理解していながらも、漠然と中国はどこか遠くの国なのだというイメージが自分の奥深いところにあったからだ。自分は表面的には親中を装っていたが、本当の意味では中国の良き理解者ではなかったことに気が付いた出来事だった。

このように誤りも大いに含んだ私の中国観をより正しい中国理解に近づけてくれたプログラムがあった。河南省鄭州市におけるホームステイだ。ホームステイでは少林寺に連れて行っていただいたり、伝統的な中国料理を食べさせていただいたりとても充実した時間を過ごさせていただいたが、その中でも特に印象に残っているのはホストファミリーの家で中国のことについて話をしたこと、そしてホストファミリーの知り合いのいる鄭州大学で学生と交流したことである。私はこういったところで今の中国の本当の姿に近づくことができたように思う。

夜、食事などが終わり、一日のアクティビティが終わって私たちが話しているとき、子供の教育のことについてホストマザーが話してくれた。私たちの泊まったホストファミリーの家は鄭州市の中心部にあったのだが、それは借家で、持ち家は郊外にあるとのことであった。そして街の中心にわざわざ家を借りてまで生活している

背景には教育格差の問題があるからだという話だった。ホストマザーによると、中国では政治や官庁の中心に近ければ近いほど教育水準が上がり、河南省であれば省都の鄭州が一番であるし、その中でも街の中心部で官庁から近いところが一番である。そしてこのことは国単位でも当てはめることができ、中国で一番良い教育を受けることのできる学校は北京のそれも中心部にあるとのことであった。こういった事情があるため、ホストファミリーは子供たちに最高の教育を与えたいと思い、鄭州市の中心部に住んでいるのであった。

この話を聞いたとき、お金をかけてでも子供に良い教育を受けさせたいという気持ちは世界共通の気持ちなのだとことを実感した。しかしそれと同時に、地域格差というものがある教育に至るまであるのだということに気づかされた。沿岸部と内陸部、都市と地方の中で大きな経済格差が存在するのが中国であり、そういった経済格差を是正するためには、貧しい人たちが良い教育を受けることが必要不可欠であると思う。そんな中で、いまだにそういった教育水準の格差が存在するところに中国の矛盾があると感じた。豪華絢爛な高層ビルがどんどん立ち並んでいく一方で、質の良い教育を受けることができず貧困から抜け出すことができない人もいる。そういった中国の抱えるジレンマのようなものが伝わってくるような出来事であった。

もう一つホームステイ中に印象に残っている出来事は鄭州大学の訪問である。鄭州大学では、ホストマザーの知り合いだという学生さんや日本語通訳をしてくれた日本語学科の学生さんと交流することができた。中国人学生と交流しているとき、彼らの興味は日本の抱える年金問題と高齢化問題にあった。それらは非常に難しいテーマであり、私も答えに詰まるところも多々あったが、とても熱心に聞いてくれた。そして私は中国も将来、高齢化問題に直面するという話を以前聞いたことがあり、それについて質問を投げかけてみた。すると、それに対する中国人の学生の回答はとても楽観的なもので、何とかなるだろうといったようなものであった。これらの交流から私が見ることができたもの、それは中国人の若者が日本の社会問題に強い興味関心を持っていること、そして中国国内の問題に関してはとても楽観的に捉えているということに気が付けたことだ。

中国の人は日本にとっても強い関心を持っている。その一方で日本人は中国のことをよく知らない。現在の日中にはこのような「関心の一方通行」状態があることをこ

こで改めて感じた。そして中国の人たちが中国の問題をそれほど悲観視していないということに関しては、日本では否定的に報道されることが多いためにどこか中国社会にプラスのイメージのなかった私の中国観が大きく転換するような出来事であった。

また少し余談ではあるが、日本語学科の学生と話していると、彼らが今まで出会ったことのある日本人は私たちを含めて片手で収まる程度であるとのことと言っていた。中国の地方に日本人が少ないということを考慮しても、全然日本人に会ったことが無いというのは驚きであった。一方で、私たちと日本語で話したことで彼女たちの日本語へのモチベーションが上がったということも言っていて、自分たちをきっかけにして日本のことをより知ろうという気持ちになってもらえたということが嬉しかった。またそれと同時に日本人の少ない地域では自分が日本人代表となり、自分のイメージが日本人のイメージになるのだということを改めて実感した。そしてそのように日本を背負って活躍していくことがかっこよいと感じ、いつかそういったことを仕事にしてみたいと思い始めるきっかけになったと思う。

これまでに紹介したこと以外にも本当に大変多くの貴重な経験を中国ではさせていただいた。そういった経験は、どこか遠くに感じていた中国が心理的に近づくことにつながり、また先入観や歴史に縛られることのない本当の中国を理解することができ、私の中国観は大きく転換した。そしてこのことが今回の中国派遣での最大の成果であったように思う。

そんな充実した中国派遣を終え、帰国した後のことである。ある日、中国人の友人に私が中国での楽しかった思い出について話しているとき、「やっと中国について正しく理解してくれた」という安堵感のようなものが伝わってきた。彼は中国から日本に留学に来ており、中国人に良いイメージのない日本社会の中で、孤立感のようなものを感じていたのかもしれない。そういった中で、中国に実際に訪れ、中国のことをちゃんと理解してくれている日本人が1人誕生したことに心を許せると感じたのではないと思う。この出来事があってから「もっとお互いの国のことを知りたいと思える関係」を築くこと。これが関係を改善し、お互いについて正しく理解することにつながるのではないかと感じた。

今の日中関係はとても一方的であると思う。中国に行ってそのことを強く感じた。ホストファミリーは私たちに「今中国は日本を見習おうとしている。中国は経済発展した。でもマナーではまだまだだ。日本は礼儀の正しい国で、そんな日本を今の中国は見習って、変わっていかねばならない。」と言ってくれた。またアンケート調査では中国人の半数近くが日本に好感を抱いているというデータもある。このように中国は日本につい

て知ろうとしてくれている。

一方で日本の国内はどうだろうか。私たちの中国のイメージは少し古くはないだろうか。中国をどこか遠い国だと思っていないだろうか。中国では日本ではまず目にしない電気で走るバス、町中も日本に比べて多くの電気自動車が走っている。そして東京からであれば北京まではたった3時間程度である。沖縄に行くのとあまり時間的には変わらない。日本人の持つ中国観。これを変え、ことこそが日中友好のカギになると私は考える。たくさん中国を訪れ、中国を知る。このプロセスを通じて日本人も中国のことについてもっと知りたいと感じるようになり、お互いがお互いについて知りたいと思える関係を築いていくことこそがこれからの日中関係に必要なのではないと思う。そうして、日中が心を許しあえる、そんな関係性を私なりのやり方で築いていきたいと思う。

今回の派遣では本当に多くの方にお世話になった。ここで心から御礼申し上げたい。

中国で見詰めたのは母国と自分

唯一無二の経験。今回この事業に関わり、私たちのことを支えて下さったたくさんの方々にまずは心の底からの感謝を表したい。

私は大学生の間を充実した時間にすることが正直出来ていなかった。6年間もの大学生活の中で、何をやってこられたか、何を考えてこられたか、6年生が始まる時ふと考えると、熱く語りたいことは何も浮かんでこない。一人旅などで旅行して少しは生を実感するような体験もしたが、どれも中途半端と感じていた。そんな中、中国に対して強い関心を抱き、偶然に見つけたプログラムがこの中国派遣だった。長期で学校から離れることが難しい状況の中で、この派遣だけは奇跡的に参加が出来る。運命と思い、応募したところ、幸いなことに団員の1人に選んでいただき、参加出来ることになった。

参加に伴う目的としては、挑戦することと人との良い繋がりを作るということ。知識だけでどんどん「頭でっかち」になるけれども、自分の目で見て、耳で聞いて、自分の肌身で感じる生き生きとした実感が足りない。そんな自分の現状を変えるために、どんどん行動していきたい、どんどん挑戦していきたい、そういう思いでこの事業に参加した。そして、このような事業に参加するような人たちは行動力に満ちて、刺激的な人が多いと思い、そんな人に囲まれることを望んで参加した。

自分の専門分野である医療で、将来的に強く関わることになりそうな中国の医療の現状や、国全体の様子を見てみたいというのも目的の一つであった。

いよいよ中国本番。北京、鄭州、杭州の三つの都市を基点に動いた。北京ではホテルの洗面所で洗濯を手洗いでしていると洗面台の底が抜けるという人生で想像したことのない経験をして、一気に中国を感じ、「ああ中国に来たなあ」と驚くと同時にわくわくを感じた。滅多にないことだそうで、ホテルで働く現地の方も初めての経験と仰っていたことは付記しておきたい。

北京語言大学での大学生との交流では一年足らずの学習で、難しいテーマに沿って日本語を母語とする私たちと日本語で議論が出来るほどの語学力を身につけている中国の学生に自分の勉強不足、努力不足を痛感した。交流自体も楽しくて、優しいいい方ばかりで、終わりには再会を誓いあうことも出来、とても幸せな時間だった。いくつかのイノベーション促進組織の視察では、いかに若者の新しいものを作る力に対して期待があるかを強く

感じた。

今回の事業で最も印象に残ったことは鄭州でのことである。鄭州は河南省の都市で、中国中央部に位置している。鉄道の要所で、中国の一带一路構想の重要な拠点とされているということから、今回中国側が私たちに見せたかったのだと感じた。こうした中国側の組んだプログラムから透けて見える中国側の意図を考えることも面白く、また学びの多いことであった。まず始めに度肝を抜かれたのは、鄭州新区の様子である。日本の建築家黒川紀章の設計した都市であるとのことで、日本人の偉大な仕事に日本人として感銘を受けると共に誇りを感じた。



鄭州新区の夜景の様子

中国では大きな都市計画が様々な地域で実行に移されており、この鄭州では、日本では考えられないようなスケール感に圧倒されてしまった。しかも美しい。日本はまだ中国に製造や都市開発などの壮大さで張り合うことは出来ないだろうなと日本人として切なさを感じた。とうもろこしをモチーフにした大きなタワーを円で囲むようにして高層ビルが立ち並んでいるのだが、タワーのふもとには水が引いてあり、公園や人が集まることの出来る文化ホールなどが建っていた。こうした様子に、中国の成熟を感じ、日本で思っていた以上のスケール感、勢い、発展ぶりを痛感した。また、様々なタイミングで環境についても考慮されており、都市の中に緑が多い公園があったり、都市計画の中に緑が想定されていたりと環境への配慮も非常に強かった。電気自動車への移行も政府が他国に先駆けて力強く推し進めており、政治のス

ピード感や社会の変革スピードを極めて強く感じる事が出来た。

鄭州では人生で初めてホームステイを経験して、本当に得難い経験になったと感じる。中国の方のホスピタリティー精神は驚くべきものがあり、本当に優しく近く接してもらうことが出来て、とても嬉しかった。一方で、言語の壁というものも感じた。言葉が通じない中での意思疎通では、自分の思っていること、相手に対して思っていること、お互いが伝えたいこと、その全てが思い通りに表現出来ない。自分の中で言語習得に対する熱が非常に高まった経験でもあった。

鄭州でのプログラムの最初と最後には、河南省青年連合会の御好意で、ホームステイを受け入れて下さった河南省青年連合会の方々と交えた盛大なパーティーを催していただいた。特に最後のパーティーは印象的で、日本と中国側で心の通った多くのパフォーマンスもあり、日中関係なく全員が一体となって心を通わせながら楽しむことの出来た最高のパーティーだった。楽しく、いつまでも終わって欲しくない、そう思える会だった。最後に全員で中国の名曲「朋友」を全員で合唱した時は涙ぐんでしまった。本当に幸せな時間で、忘れることの出来ない大切な思い出になった。



鄭州での夕食会の記念写真

食の楽しみも今回のハイライトであった。中国料理と言えば、円卓料理であるが、今回の派遣では精進料理から各地方の名物料理まで沢山の円卓料理を経験させてもらった。辛さや脂っこさを心配していたが、日本人の口にも合う料理が多く、毎回の食事が楽しくて仕方なかった。

料理は食べ切ってしまうと足りなかったという意味になるそうで、食べ切れないほどの量が出る中で、残した方がホスト側は喜ぶという文化は日本との大きな違いで

あった。中国では見た目が重視されるとのことで、車も大きな車が良いとされ、料理での魚も魚丸ごとで運ばれてきたり、お土産や商品の箱が立派で豪華であったり、そうした文化の違いも興味深かった。

日本でも流行っているタピオカ飲料だが、中国ではタピオカに限らず、数え切れないほどの飲み物の店があり、そのどこも安く種類も豊富で、楽しくて美味しくて仕方がなく、ずっと何かの飲み物を片手にしていた。その中のチーズティーというものがとても美味しく、帰国してからもとても恋しい。

初めての中国だった。中国のことを好きになり、中国人のことを好きになった。派遣前とは違って、漠然とした先入観や偏見を持って中国と言う言葉を使うことは無くなったし、中国人と言う時に、個々具体的な中国で出会った人を想定して話が出来るようになった。中国と中国人への悪いイメージは本当になくなった。

ただ、今回私たちが見せてもらった中国は、中国の良い側面ばかりであったと言うことも忘れてはならないだろう。発展の裏側で様々な問題を抱えていることも想像に難くない。これから日本で中国のことを情報として知る場合は、良い側面とその逆の側面とを今回の実感をもとに正しく捉えたい。

今回の派遣では、中国のことを深く考えると同時に日本のことを深く考える機会にもなった。中国のスケール感、発展のスピード感到に驚き、この迫力はもう日本では味わえないと思った。しかし、日本は日本のいいところがある。日本はコンテンツ、ホスピタリティー、清潔さ、「Made in Japan」のブランド。他にも先人が築き上げ、残してくれた日本の素晴らしさは沢山ある。日本のことについてもっと学びたい、もっと知りたいと強く感じるようになった。自分が日本人として世界の友人に対して胸を張って語ることが出来ることが沢山あるはずだ。

もっと中国が、世界が、近く親密に感じられるように日本が出来ることはなにか。日本人として出来ることはなにか。私は単なる1日本人に過ぎないけれども、大きな視点、考えを持って今後の人生を歩んできたいと思う。

そして、何よりも団の皆に出会えたことが今回の事業で得た最も大きな財産であったと思う。

思えば長いようで短い、一月にも満たない期間しか一緒に過ごしていない団員の皆を、家族のように感じる事が出来るようになったことは何よりの財産になった。この団にはこのメンバー以外なかった、そう思う。

交流というものはその一度の影響はもしかしたら大き



出発前研修での記念写真

なものではないのかもしれない。しかし、続けていくことにこそ意味があると思う。過去から今に、そして未来へと続く交流のリレーの一人の走者として走り続け、次にバトンを渡していく役割を果たしていきたいと思う。積極的に事後の活動にも参加し、地域のコミュニティの活性化、地域での様々な交流事業も盛り上げていきたい。

中国で一番見詰めたのは母国と自分であった。自分の人生にとって大切な時間となった。今回の事業を通して私たちを支えて下さった日本と中国の多くの方々にもう一度心からの感謝を表して、私の報告の締めとしたい。

日本と中国の架け橋となる

10月29日から11月9日の12日間で中国 北京、鄭州、杭州の3都市を回った。

私がこの事業に参加したのは、自分の目で中国の今を見たいと思ったからである。中国という国について、興味を持ち始めてから少しずつではあるが独学で中国語を勉強していた。しかし、隣国でありとても大きな国であるのに、中国という国について知らないことだらけ。テレビや新聞ではマイナスなことばかりが報道されているのが目につく。自分の中国に対するマイナスイメージはどこから来ているのかと考えると、マスメディアで見た情報、聞いた情報からであった。だが、本当にそうなのだろうか。誰かの意見に流されて自分も偏った見方をしていないか、取り上げられるのは一面で、そんな情報を鵜呑みにしていいのだろうかとか疑問を抱いた。このようなことから、事業に参加し実際に中国に行き自分自身で判断したい、学びたいと強く思った。

都市の発展

今回北京、鄭州、杭州を回ったが、どこの都市も北京に劣らないくらいの発展をしており、都市発展の勢いを感じた。中でも鄭州航空港経済総合実験区が印象に残っている。この実験区は、まだ途中であり、今回は計画の模型を見ただけであったが、空港を中心とした街づくり、というスケールの大きい開発に驚いた。空港というと、都市部から少し離れたところに大きく構えていることを想像する。しかし、空港を中心に置き、そこから住宅地や学校、大使館までも誘致するという計画であった。また、鄭州から、高速鉄道を利用して中国全国3時間で行けるようにするということがあった。ホームステイの時に鄭州は交通の要所であると聞いていたため、空港や高速鉄道の開通でより活発な人の行き来が期待できると感じた。それとともに、鄭州はほかの都市に比べて空気が悪いと感じられたため、環境問題の面で課題が増えるのではないかと考えた。

今後、この都市が中国の一大都市になるのかと思うと、どんどん姿を変えて発展していく街とこれからのこの場所に住む人の生活にとってもわくわくした。

ホームステイ

ホームステイの組み合わせは当日にならないとわからないとのことだったため、出発当初から最も緊張していたものだった。私のホームステイ先はお父さん、お母さんと6歳の男の子と2歳の女の子の家庭だった。会って

すぐに、少林寺に連れて行ってもらいカンフーショーやガイドさんの解説付きで少林寺を回った。夕方には見せたい夕日があると言われ少林山を登った。山の上まで行くのは大変だったが、そこで見た景色は絶景であった。頂上までは日が暮れてしまうため行けなかったのもう一度チャレンジしたいと思う。

コミュニケーションをとるにあたって、私は中国語が本当に少ししか分からず、家族は日本語を全く話せないという形だった。お互いに英語であればなんとか意思疎通が取れるほどであったため、翻訳アプリと拙い中国語、英語でコミュニケーションを図った。はじめは緊張もあり言葉が通じないためお互いに遠慮もあったが、好きなものは？という質問から、車のことについて話が盛り上がり、少林寺のことや家族のこと、鄭州のことなど沢山のことを教えてくださった。特に夕食で屋台の食べ物を食べたことが印象的である。ザリガニや麺、健康飲料と書かれた炭酸飲料など、これが鄭州のソウルフードだと紹介してくれた。派遣中は円卓での食事が多かったが、屋台で食べる若者の食事を体験することができて、また一つ文化を体験することができたのはうれしいことであった。

2日目はいつも買い物をするという市場と少し離れた街の中心部へ行った。街には自転車やバイクが多く、またシェアサイクルの自転車が歩道にたくさん停められているのを見て、日本との違いを感じた。また、中国建国70周年を記念した幕やアートが街のどこを見てもあることが印象的だった。

食事は家で家庭料理をいただいた。いつでもどこでもスマートフォンのアプリで出前を取ることが多いそうで、ほかの家庭に行った団員に話を聴くと、外食や出前での食事が多く手作りの家庭料理は食べていないという話も聞いた。一方で、私の受け入れ家庭ではお父さんが料理を振舞ってくれた。家族で食卓を囲むという形はとても温かく、会話も弾み楽しい時間を過ごすことができた。

食事に行っても観光地で買い物をしても、バスに乗っても支払いはいずれスマートフォンの電子決済を利用しており、キャッシュレス社会であることを痛感させられた。日本人は中国の電話番号がなければ電子決済が利用できない。一度、ファミリーのお母さんのスマートフォンの調子が悪くなってしまい、バスに乗れないことがあった。現金は持ち歩いていないと言っており、スマートフォンだけあればいい分、トラブルに対しては難しい

と感じた。

ホームステイを通して感じたことを不自由なく伝えたいと強く思った。翻訳アプリを通してしまうとニュアンスが変わってしまうこともある。相手とより深くコミュニケーションをとる手段として、自分の中国語のレベルを上達させたいと強く思った。



ホームステイファミリーとの昼食

人との繋がり

私は、夏に中国から招へい青年が東京に来ていた時に交流会と意見交換会に参加した。北京や杭州で再開した時に、私のことを覚えていてくださった。自分のことを覚えていてくれて、歓迎してくれたことはとても嬉しかった。招へい青年で、今回訪問しなかった都市にいる方もWeChatで中国に来たことを温かく歓迎してくださった。日本に帰ってきてからも、連絡をとることもある。WeChatで気軽に連絡を取り合うことも交流の1つであると思う。中国の方とSNSで連絡をとったり、SNSの使い方を見ていると、日本人よりも気軽に連絡をとっており、レスポンスが早いことが印象的だった。交流を派遣時で終わらせるのではなく、持続的に交流を続けることが必要であり、ネットを介してであっても日常的に交流があることで、私たちが団目標とした表面的なつながりではなく心と心の繋がった交流の1つになると考える。

派遣後の活動について

派遣後取り組むべきこととして、「発信すること」が重要だと感じる。今回の派遣を通して私たちは中国という国、中国に住む人のことを知り、体感した。このプログラムで中国に実際に足を運び12日間過ごした私たちだからこそ学べたことや気づきがある。それらを自分



中国招へい青年との再会、餃子づくり

たちの中で過去の経験として終わらせるのではなく、未来の日本と中国のために私たちの経験を伝えていく必要がある。IYEOをはじめ、様々な機会を発信するべきだと考える。中国や中国人に対してあまり良いイメージを持っていない人も多いと思う。中国人の日本への興味度合いに比べて日本人の中国に対する興味度合いは低い。全青連で講義を受けたときもこのようなことを講師の方がおっしゃっていたと記憶している。友好な関係を作るには、まずは自分から相手のことを知ろうとする姿勢が必要だと感じた。中国で出会った人が日本のアニメを知っていたり、こんな日本語を知っていると話してくれた時には日本という国に興味を持ってくれていると感じ、とても嬉しかった。このように相手文化や生活に興味を持つことで互いに歩み寄ることができると思う。もっとたくさんの人に中国の魅力を伝え興味を持ってほしい。まずは自分の近い人、そして大学の友達や母校へ今回の事業の報告活動を行いたいと考えている。所属する神奈川県IYEOでは、帰国後すぐに発表の機会をいただき活動報告を行った。また、私は報告会の実行委員を務めており、そこではより多くの人へのアプローチがしたいと考えている。

最後に、事前研修、中国青年招へい、12日間の派遣、事後研修とこの事業に参加しなければ経験できなかったことや貴重な場所、人に出会うことができた。この事業での経験や学んだこと、なによりも人との出会いは、私の人生の中でとても大きなかけがえのないものである。私にきっかけをくれた大学の先生、派遣を支えてくださった方々、温かく迎えて下さった方々や41回派遣団のメンバー、全ての人に感謝したい。

次の10年に向けて

私は現在、就職活動を行っている大学三年生だ。長い学生生活の幕が閉じようとしているなか、仕事や結婚、子育てなど将来についてこの短い時間で考えなければならぬことはたくさんある。不安や迷い、期待が入り混じったままの状態での派遣団に参加してもよいものなのか、またそのことの不安を感じることも参加前はあった。しかし今となってはそういう状態であったからこそ参加してよかったと思っている。ここでは、特に自分の価値観に響いた経験を二つ述べたのち、今後の展望について追記する。

一つ目はホームステイでの経験だ。私たちは全国青年連合会河南省支部の副主席を務めていらっしゃるご家庭にステイした。私たちはこの二日間で歴史文化博物館や自然博物館、宋の時代に都だった開封の様子を再現した清明上河園に連れて行っていただいた。我々の中国語は拙く、英語もお互い話せない中で、翻訳アプリや身振り手振り、表情を用いて懸命に中国の歴史や文化についてホストファミリーに教えていただいていたことは今でも鮮明に覚えている。特に開封での経験は中国ならではの開発スピードの速さとそれぞれの建物の大きさ（規模感）、地元の名産である菊の花をふんだんに使った展示の数々の華やかさに目を奪われてしまった。

その中でも開封を一望できる塔に上ったことがあった。私は景色を見て感動していたのだが、その隣ではじっと静かにその景色を眺めているホストファミリーの姿があった。私は中国できれいな景色を見たときにどういったらいいのか疑問に思い、彼に尋ねたところ、「中国では美しい景色を見たときに言葉を用いない。言葉に表すと意味が変わってしまうからだ。」と教わった。

当時はなるほど程度だと思っていた。しかし振り返ってみるとこれはコミュニケーションにおいて大切なことを学ぶきっかけになった。その大切なこととは「表面上の違いではなく、その奥にあるものを理解すること」である。そしてその奥にあるものがなぜ生まれたのか背景を理解することが大切である。当たり前ながら、人によってきれいなもの、おいしいもの、悲しいもの、憎らしいものは違ってくる。そして感じ方も違えば表現の仕方も異なる。時には相手が怒っているように見えたりつまらなそうに見えたりもするが、批判的にならないようこらえることが重要である。本当は何を思っているのか、なぜそう考えているのか相手を想い、心と心を通わせることがコミュニケーションにおいて大切だと実感し

た。そしてこの経験のおかげで残りの派遣期間での学びの質の向上にもつながった。一つの建物を見ても、なぜここに建てたのか、どんな人が住むのか、もともとはどんな場所だったのかなど物事を見る視点が格段に増やすことができた。結果、研修前に課題として挙がっていた「質問力」の向上にもつながった。

ここでもう一つホームステイでの体験で印象的だった言葉がある。「最高の客人には最高のお酒と最高のお茶をふるまう」。夕食に豪華な料理とともに教わった言葉である。この言葉からも、心を許した人には熱烈に歓迎し、とても親切にしてくれる中国人特有の国民性に直で触れることができた瞬間だった。

二つ目として、大学を訪問して意見交換を行ったことが印象的である。

私は大学で国際交流団体の代表として活動に従事しているので中国人学生と交流することは多々ある。ただ彼らとは休み時間を通しての交流であったり、正規の学生として日本人と同じように勉強していたりするので中国で勉強している学生の姿を見ることがなかった。こうした背景から中国訪問以前は中国人学生の勉強に対する意欲の高さ、競争の厳しさ、成果などは話に聞いていても実感することができなかった。しかし、今回で訪問、意見交換をすることで上記した現状を肌で感じる事ができた。

具体的に言えば、私達が河南科技大学に訪問したとき、外や廊下で壁に向かって教科書を開いて暗記をしている学生の姿がたくさんあった。後日、日本で友人に聞いたところ、それは自習室が満席になってしまったがために勉強している人達なのだと言っていた。つまり、自習室の席を確保しなければならないほど勉強しようとする学生が大勢いるということだ。ここに日本の大学生として危機感を強く覚えた。私の大学ではそこまでして勉学に励もうとする学生は少なく、目的が単位の取得に終始してしまっている学生が多いと感じているからだ。

加えて、私は「結婚観」と「若者の就業」をテーマに意見交換を行った。意見交換のなかで彼らは自分達の意見をしっかり主張するだけではなく、自分達の課題も認識した上で日本はどうなっているのか、課題に対してどういった対策を行っているのかを繰り返し聞いてきた。私は彼らの現状に満足せず、他者のいい点をどんどん学んで取り入れようとする姿勢に多大な刺激を受けた。私はこの経験を通して、改めて自分の学生生活を顧みて残

り少ない時間をいかに有効に使えるのかを考えて現在過ごしている。

「結婚観」での意見交換の中身について、彼らと意見を交えることで私は自身の結婚観を少し確立することができた。意外にも中国では女性の社会進出、いわゆる共働きが発展しており、彼女らは結婚後、退職するという選択をする人がおらず、この点で日本とは異なると感じた。特に「母親が子育てのみに注力するのは子供の教育によくない。仕事でこそ得られる考えも必要だ。」という意見は自分の先入観を覆す意見であったので印象に残っている。彼らの仕事に対するマインド、そして日本人側（性別、年齢、学生、社会人と様々である）の意見を通すことで自分にとっての結婚観というものを確立することができたのは貴重な体験であり、今後のライフプランへのターニングポイントとなった。

最後に、今後の展望も含めて派遣を通して得た意識の変化について記述する。私は今回の派遣を通じて「日本代表」であることを自覚し、そして「日本」について考えるようになった。例えば大学に訪問した際には、「中国人青年はこういう考え方をするのか、では日本人の場合はどうだろうか」や、「彼らの勉強やその後のイノベーションへの意識は目を見張るものがある。この現状を見て日本人青年はどうすれば対抗、協調していけるだろうか」などを考えた。また鄭州空港経済先行区に訪問したときは、計画開始からわずか7年足らずで大規模なものを作り上げてしまう（まだ半分ほどは完成していない）そのスピード感と最新技術を最大限に盛り込む革新性には圧倒されてしまったことを覚えている。しかしそのような場合であっても、団員達と「中国の現状を見た我々だからこそ何か日本に還元できないだろうか」「日本のこの分野は中国にない強みではないか」と議論し合ったことで日本について様々な角度から見つめることができた。

他にも派遣期間中は団員達とともに見たこと、感じたことを共有し、議論し合ってきた。時には深夜まで熱く語り合うこともあった。そしてこの時間は私にとってかけがえのない成長の場であった。だから今後の活動では、私は12日間を共にした団員達と日本を盛り上げていきたいと思っている。私自身としては大学の国際交流団体で中国人に限らず、様々な学生と交流し、それぞれの魅力をまたたくさんの人に伝えていきたい。そして就業後は日本のプレゼンスを高めつつ、各国と協調しながら世界全体がよくなるような活動の一端を担っていきたい。

また、少し話は逸れるが、私は総務係として団員達の体調を確認するのと同時に、全員とコミュニケーションを積極的にとることを意識していた。誰が、どういった

思いを持って参加し、どういったことをしていきたいのか、その背景には何があるのかなどを色々な場面を通して知るように努めていた。聞いていると各々「自分」というものを持っており、個性もあれば自分だけでは知り得ないような知識がたくさんあって非常に刺激を受けた。

将来、団員達は様々な分野で活躍するのであろう。10年後、彼らと再会するのが楽しみで仕方がないので、彼らに負けないように自分自身この派遣を経て得た知識、経験をもとにもっと成長して日本を代表する人材として活躍していきたい。

最後に、今回の派遣が無事に成功し、非常に意義深いものになったのは内閣府、全青連の方々や青少年国際交流推進センターのスタッフの方、団長、副団長、団員その他派遣団に携わった全ての方々のおかげである。ご尽力して頂いた皆様方にこの場を借りて感謝を申し上げます。

意見交換成果

令和元年度 日本青年中国派遣

意見交換の概要

日 時	10月31日 13:20～16:20
場 所	北京 北京語言大学
参 加 者	日本青年 24名、中国青年 30名
スケジュール	アイスブレイキング40分、意見交換90分、成果発表会50分

分科会の概要

テ ー マ	キャッシュレス社会
ト ピ ッ ク	両国のキャッシュレス決済の現状
参 加 者	日本青年 5名、中国青年 5名

成 果

1. 中国での現状

- 学生の大半が現金を持ち歩いておらず、WeChatPayやAliPayを使用している。
- クレジットカードが浸透していない。
- キャッシュレス決済比率が2018年時点で60%と世界2位である。
- 人民元自体を見る機会が減っており、スマートフォンの決済アプリを通して支払うか、銀聯カードを使用して支払うことが多い。

2. 日本での現状

- キャッシュレス決済比率は2016年時点で約20%であり、2025年までに2倍の40%まで引き上げることを目標としている。
 - ・経済産業省によるキャッシュレス・ビジョン。
 - ・一般社団法人キャッシュレス推進協議会によるキャッシュレス・ロードマップ。
- キャッシュレス消費者還元事業により、キャッシュレス決済利用者を増加させる狙い。
- 2019年10月の増税を機に政府がキャッシュレス推進に力を入れ始めた。
- 日本国内でLINEPayが使用できる店舗ではWeChatPayが、PayPayが使用できる店舗ではAlipayを使って支払いを行うことが可能である。
- 日本はクレジットカード利用率が非常に高い。
- キャッシュレス社会に対して女性の支持率は男性と比べて低い。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- 中国と日本のキャッシュレス決済普及率には大きな差がある。
- 日本人はインターネットショッピング時に個人情報を入力することには抵抗がないが、スマートフォン決済の場合は不安を抱く。
- PayPayはAliPayのデータを分析したうえで効率よく普及させようとしている。
- 世界規模でキャッシュレス化が進んでいる。
- 日本は中国と比べて個人情報というワードに敏感である。

キャッシュレス社会グループ感想

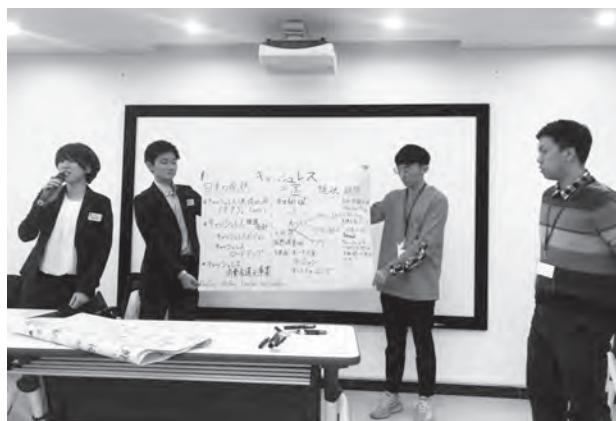
私たちは北京語言大学において「キャッシュレス社会」というテーマのもと、日本青年5名、中国青年5名の計10名で意見交換会を行った。意見交換開始後なかなか小テーマが決まらず、互いが調べてきたことを淡々と発表する時間が続いてしまったが、限られた時間で両国の現状を知ることや疑問を伝え合うことができた。

日本ではスマートフォン決済の普及率が、中国と比べて圧倒的に低いことを伝えたと北京語言大学の学生から「Amazonにクレジットカード情報を入力することには抵抗がないのに、どうしてスマートフォン決済の個人情報入力には不安を感じるのか」という質問をされた。言われてみればその通りだと感じた。中国側は利便性が最重要であって危険な目にあうことは少ないというのに対し、日本では実際に個人情報流出の実例も過去にいくつかある。信頼を築くには時間がかかるし、それが崩れるのも一瞬であることを思い出した。そのうえで日本人が多く利用しているクレジットカードの信頼度はどのようにして構築されたのか、自国のことではあるが興味を持った。

対して中国で主流のWeChatPayとAlipayについて話した際、それらを訪中外国人は使用できないという短所が挙げられた。中国でなぜここまでスマートフォン決済が普及しているのか知りたいと感じる気持ちが強くとも、実際に使用できないのは日本人青年として少し残念な部分もあった。今後何かを行っていく際にはグローバル的目線で考えていくことが必要になるのだと感じた。

また、議論の最後に中国人学生からFacebookのリブラについての発言があった。現在の日本ではいかにキャッシュレス化を推し進めていくかを考えることが多いが、彼らはキャッシュレスの未来を見据えているように感じた。日本が現在目指しているのは2025年までにキャッシュレス決済比率を40%へ引き上げることであるのだが、中国はすでに60%という値をたたき出している。今自分たちがいる状況は違うのだが、私たち日本人青年もパイオニアとしての意識を持ち、日本を牽引していかなくてはならないと強く感じた。

今回は深く意見交換を行うことはできなかったのだが、中国人学生から直接日本のキャッシュレスに対する疑問を聞くことが出来たのは良い刺激となった。それは中国人にとっても同じであることを願いたい。



分科会の概要

テ ー マ	青年の就業・起業
ト ピ ッ ク	両国の就業と起業の現状
参 加 者	日本青年 5名、中国青年 6名
成 果	
1. 中国での現状 中国では大学を卒業した後に大学院進学を目指す人が多く、大学卒で就職を目指す人は少ない。それは大学院を卒業すること自体の社会的価値が高く「大学卒での就業は大学院に行けなかった人が就業したと思われやすい」、就職も大学卒より高い給料がもらえるなど、高い評価を得られることがあげられた。 中国では起業を目指す青年は多く、支援や取り組みは充実している。その背景には政府による起業支援が充実していること。中国社会の人口過多により、就職が難しいことがあげられた。 2. 日本での現状 日本では大学を卒業した後に大学院進学より就業が重視されやすい。「平成29年3月大学（学部）卒業後の状況では、卒業者約57万人中、大学院等7万人」となっており、進学者は少ない。それは大学卒業時点での社会的価値が高く、就業する場合も多くの企業で大学新卒者を中心に採用活動が行われ、大学院進学までいかななくても評価されやすいことがあげられた。 日本では起業を目指す青年は多くなく、支援や取り組みは少ない。要因として様々なものがあげられるが、青年向けの起業支援が充実していないこと、労働人口が少なく就職者の売り手市場になっていることで、就業に目が向きやすい環境であることがあげられた。 3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと 日本と中国の就業制度や、起業支援体制の違いを学んだ。日本でも学歴は就職の際に重視されるが、中国では特に重視され就業や社会的評価に影響すると学んだ。日本では大学卒業と共に就職する流れがあり、起業支援よりも就職支援が充実しており、大々的に広告される就業支援により起業の選択肢が減少していると気づいた。中国のように長期的大々的な政府による起業支援も日本青年の起業率増加に必要であると考えた。	

青年の就業・起業グループ感想

私たちのグループは、「青年の就業・起業」をテーマに意見交換を行った。まず、日本側から就業の現状や起業への課題について紹介し、その後中国側からも調べてきた事柄の共有をしてもらい、ポスター作成に向けて相違点・共通点をあげながら意見交換を進めた。

私が意見交換のなかで印象に残っていることは、両国の大学卒業後の進路の違いである。日本には、新卒一括採用制度があり、大学生の多くは3年生の時から就職活動を始める。また、日本の大学生で大学院へ進学し専門性を高めようという意識を持つ人はあまり多くない。対して、中国は学歴社会で大学を卒業しただけでは給料が低いため、大学院進学を目指す学生が多いという。そこには、労働人口が毎年増加し、都市部では農村部からの人口移動もあるため、就職が難しくなっている背景もある。青年は経験も浅く競争力が低いため、大学院へ進学して他の求職者との優位性をつけるそうだ。私は、大学を卒業したら就職することが当たり前のように感じていたが、国によって青年が進路選択をする際に置かれている状況は違うことが分かった。さらに、大学院については、さらに学問を追求する意義や大学院を卒業することが社会でどれだけ強いスキルになるかを考えたことがなかった。日本の青年も、みなが就職をするから自分もするといった考え方ではなく、キャリア形成をするにあたって就職がいいのか大学院進学が良いのかを考えたいので進路選択をしていくべきではないかと思う。

起業に関しても両国間では違いがあった。中国青年の起業への意識は日本に比べて高く、インキュベーション施設を設置する大学もあり、中国政府も「大衆による創業、万人による創新（イノベーション）」の「双创」を推進している。一方日本では、起業について学ぶ機会が少ないことや資金やリスクの面で課題があり、起業をする青年は少ない傾向にある。中国における若者の創造性に期待し、国をあげて起業をサポートする体制、若者のチャレンジ精神を見習い、日本でも起業がより盛んに行われるようになれば、両国の青年同士がビジネスを通じて協力していくことも可能ではないかと考えた。

この意見交換を通して、お互いの国における青年の就業・起業についてだけでなく、青年を取り巻く社会の情勢への理解を深めることができ、とても有意義な時間となった。



分科会の概要

テ ー マ	SDGs・ジェンダー平等
ト ピ ッ ク	ジェンダー平等の実現のために青年がすべきこと
参 加 者	日本青年 5名、中国青年 6名

成 果

1. 中国での現状

- ・男女平等という観点では、いわゆる男尊女卑の傾向はある。
- ・女性に対する心理的、性的な暴力も起こっている。
- ・地方では、女性は家で家事をするという伝統的な状況が残っており、働く女性はまだ少ない。
- ・一方都市では、女性が結婚や子育てのために仕事をやめるということは少ない。
- ・地方と都市でジェンダー平等の考え方に違いが生じている。地方で女性が働かない理由として、高等教育まで受けられないことと、田舎では体力が必要な仕事が多い、ということが挙げられる。
- ・結婚は、中国において最も重要なイベントである。
- ・バイトや就職活動の面接の際、彼氏の有無、結婚願望について聞かれる事があるなど、女性のプライバシーの侵害が起こっている。
- ・2018年のジェンダー・ギャップ指数によると、中国は103位であった。
- ・中国は、高等教育、専門家や技術者数では男女平等と評価され、世界ランク1位を取得した。
- ・しかし、中等教育、出生率、健康寿命では男女間で差があると評価された。

2. 日本での現状

- ・2018年のジェンダー・ギャップ指数によると、日本は110位でG7の中で最下位であった。
- ・識字率、初等・中等教育、出生率の分野では男女間に不平等は見られないという評価で、世界1位のランクだった。
- ・しかし、労働所得、政治家、経営管理職、教授・専門職、高等教育、国会議員数では、男女間の差が大きいという評価を受け、いずれも世界100位以下であった。中でも最も低いのは、国会議員数で、世界130位だった。
- ・そのような状況を受けて、安倍政権は「すべての女性が輝く社会づくり」を推進している。
- ・また、民間や地方自治体でも積極的に女性の活躍を推進しており、日本国内だけでなく、海外の女性活躍の推進を行っている団体もある。
- ・日本ではセクハラを受けた時に相談できるセンターがある。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- ・中国も日本と同様ジェンダー・ギャップ指数は低い、要因はかなり異なるもので、むしろ対照的なものである。
- ・共通点として、女性は見えない差別を受けており、また「男性または女性はこうあるべき」という固定観念があるということが挙げられる。
- ・相違点として、都市では結婚後も女性は働き続ける人が多いと聞いて、中国の方が女性の社会進出が進んでいると感じた。一方、就活で結婚願望や彼氏の有無などを聞かれるなど、中国には女性の活躍の場はあるが、活躍するまでにセクハラを受けていると感じた。日本は、管理職や国会議員などは女性が少ないことから、男性の方が女性よりも上の立場にあるべきという風潮が残っていると思った。
- ・日本における問題も、中国における問題も、まずは自分たちが向き合っていくことが大切だと思った。
- ・LGBTなど従来の性に分類されない人もいるため、性別ではなく相手を1人の個人として認める事が大切である。
- ・そして自分たち若者の考えを発信し、上の世代の古い考えを直すべきである。

SDGs・ジェンダー平等グループ感想

私たちは、日本青年5人と中国青年6人でSDGsの1つである、ジェンダー平等について意見交換をした。ジェンダー平等は非常に大きなテーマで、青年の役割という点にひきつけるのが難しかったが、円状になってフランクな雰囲気の中行われ、また使用する言語が日本語であったため、積極的に自分の意見を言うことができたと思う。

日本と中国は同じ東アジアの国で、世界ジェンダー・ギャップ指数を見ても似たような立ち位置にいるが、意見交換を進めていく中で、共通点と相違点に気づくことができた。

共通点として、女性は見えない差別を受けており、「男性または女性是这样あるべき」という固定観念があるということが挙げられる。日本も中国も性によって差別されない平等な社会というにはほど遠く、意見交換をした学生の中にも性別によって差別を受けていると感じた人も実際にいた。

相違点として、中国の都市では女性は結婚後も働く人が多いが、就活の時に結婚願望や彼氏の有無などを聞かれることもあるということから、中国では女性が活躍することはできるが、活躍するまでにセクハラを受けていると感じた。一方、日本では就活の際にプライバシーに関する質問はされないが、管理職や国会議員などは女性が少ないことから、男性が女性よりも上の立場に立つべきという男尊女卑の風潮が残っていると感じた。

私たち青年ができることは、性別に関係なく個人として相手を尊重し互いに向き合うこと、自分の権利を主張すること、そして自分の考えを伝え、上の世代の人の考えを変えるべきという意見でまとまった。隣国として互いの置かれている状況の違いも理解しつつ、ともに協力しながら問題解決を目指せると思った。

今回の意見交換会では、中国の大学生の意見を聞けて、メディアを通さない、近い年代の人から見た中国の現状を知ることができ、とても興味深いものであった。また日本側の現状も伝えることができて、双方にとって相手の国を知るとてもいい機会だったと思う。



分科会の概要

テ ー マ	結婚観
ト ピ ッ ク	女性は結婚しても働きますか？
参 加 者	日本青年 5名、中国青年 6名

成 果

1. 中国での現状

- ・女性の社会進出が進み、子育てや家事は双方の両親のサポートを受けている。
- ・「子育てや家事をすることが人生の全てではない」や「子供を教育する上で、仕事の考え方も必要である」という考えから、仕事をしている女性が多い。
- ・中国では競争社会のため、高学歴化が進んでおり、女性も同様に大学院まで進学する人が多いため、結婚する年齢が高くなる晩婚化が進んでいる。
- ・結婚相手を探すため、上海では公園や広場に親が集まり、自分の子供のプロフィール（学歴・職業・身長など）を書いた紙をポスターにして持っていき、その情報を元にお見合い（結婚）相手を探すという婚活方法がある。
- ・農村部では結婚する際に男性側に持ち家・車・家電などの有無が重要視される場合がある。

2. 日本での現状

- ・「結婚」は長い人生の選択肢の一つとされ、結婚の有無や結婚の捉え方の多様化が進んでおり、晩婚化や未婚率の上昇は日本社会の大きな社会問題となっている。
- ・「結婚」をする上で相手に求める理想と現実の給与に関する経済面のギャップが大きく、結婚をする上で大きな障害になっている。
- ・各自治体は婚姻数の上昇と結婚を望む人の支援のため、結婚相手の候補を探す手伝いやデートの時のコーディネートチェックなど様々なサポートを整えている。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

今回の意見交換では、日本・中国の両国の「結婚観」に対して大きな差異はないように感じた。というのは、日本・中国の両国の学生は「結婚相手」に対して、精神的な部分で支えあえることを重視しているからだ。また、近年両国はともに女性の社会進出が進み、晩婚化が大きな社会問題になっているという類似点も見つけられた。ただ、日本人学生と比べて中国人学生は、結婚後も働きたいと考える学生がほとんどであった。なぜなら、現在専業主婦をしている人が少ないという現状もあるが、家庭以外に職場というコミュニティーを持ち、自分の能力を存分に発揮したいと考えているようだからだ。一方日本人学生は、専業主婦になりたいという学生が多く、結婚後も「家事は女性の仕事」という伝統的な価値観が依然として残っており、封建的であるように感じられた。

結婚観グループ感想

私たちは、日本青年5名、中国青年6名でお互いの「結婚観」について意見交換を行なった。この意見交換は円状で行われたため、全員の顔を見て話すことができ、とても実り豊かな意見交換ができた。

私たちのグループは「結婚観」について以下の3段階で話を進めた。

まず日中の結婚の現状を知るため、日本側は「結婚時に男性の経済力を重視していることや晩婚化、そして各自治体による結婚のサポート」について紹介した。その後中国側からは、「親が代行で婚活を行なっていることや女性が結婚相手に求める条件として車・家を持っているかを重視する」ということを聞いた。

次に、各青年が持つ各々の「結婚観」について話し合った。話し合う前は、「結婚観」は個人的見解があるため、それぞれが違った考え方を持っているのだろうと考えていた。しかし、全員の中国青年から「子育てや家事をすることが人生の全てではない」や「子供を教育する上で、仕事の考え方も必要である」などと結婚と仕事の両立を考えており、日本の青年は専業主婦になりたいと考えていた人が多数だったため、日本では女性の社会進出が進められているが、封建的な考え方が残っているように感じられ、両国の「結婚観」の違いを実感した。

最後に、「女性は結婚しても働き続けるか？」というテーマを設定し、話し合った。グループの中で意見は分かれ、日本青年2名と中国青年6名は働き続けたいと考え、日本青年2名は働きたくない、どちらでも良いと考える日本青年が1名という結果になった。働き続けたいと選んだ理由としては、男性が転職した際のリスク回避のためや家庭以外にも社会とつながるコミュニティを持っていたいことなどが挙げられた。また、働きたくないという理由には、子供が自分で身の回りのことをできるようになるまでサポートするためや仕事と家庭の両立が難しいことが挙げられていた。最後に、どちらでも良いを選んだ日本青年は、結婚する相手の考え方を尊重したいため、特に結婚相手に求める固定観念はないという理由を挙げていた。

私たちのグループは、それぞれが幾らか異なった「結婚観」を持つグループだったが、自分とは異なる考え方も理解しようと、親身に耳を傾け、国籍は問わず各々で積極的に質問していた。そのため最終的な考えをまとめる際にも、全員の意見を尊重しながら進めることができ、有意義な意見交換を行うことができた。



分科会の概要

テ ー マ	世界貿易保護主義が台頭する中の中国と日本
ト ピ ッ ク	米国の動向に注意して
参 加 者	日本青年 4名、中国青年 7名

成 果

1. 中国での現状

- ・中国は現在経済発展が著しい
- ・実際のところは発展している所としていない所の二極化も激しい
- ・米国との貿易戦争
- ・日本に対しては比較的良好な報道が多い
- ・中国の大学生の日本へのイメージも比較的に良い
- ・自由貿易圏の拡大

2. 日本での現状

- ・中国に対してのネガティブな報道がある
- ・中国の台頭に対する危機感が大きい
- ・日本市場の縮小により、国全体の外向き思考がある
- ・「中国崩壊」などのセンセーショナルで実態にそぐわないような過激な出版物や報道による国民の誤解もある
- ・米国との関係が歴史的に見ても深い中で、米中関係が冷え込む中で日本の立ち位置を模索している
- ・TPP11の締結
- ・自由貿易圏の拡大

3. 意見交換の内容

- ・日中間のFTAの更なる活用
- ・何よりも自国産業を強化する
- ・一国だけに依存する構造を避ける
- ・超大国となった米国と中国の間を取り持ち、日本が大きな役目を果たすこと

4. 考察

日本での報道や印象とは異なり、中国の学生は中国が未だ発展途上国であると考える傾向にあった。日本人の私達が思っている以上に自国はまだ成熟していないという印象も持っていることは印象的であった。中国側からの日本を認めているような発言も多くあり、日本と中国が更なる協力を行っていくことによって、より両国の友好は深まり、経済的にも政治的にも関わりが深まっていくはずだ。

貿易に関しては、1個人として国家間のことにコミットしていくことは容易なことではないために、議論は非常に難しいものとなったが、日中双方側ともFTAなどを利用して自由貿易を促進していく方向が望ましいという結論に達することが出来た。

また、日本側において大きな問題であると感じたことは、報道や日本人の中国への誤った、もしくは偏った理解である。マスメディアや個人からの情報発信などがより実態に即したものにすることが望ましい。

世界貿易保護主義が台頭する中の中国と日本グループ感想

中国青年7名、日本青年4名で世界的に問題となっている「貿易保護」について議論をした。お互いに大学生が多い中で、国レベルの大きな議論は少し難しかったが、意見を交わすうちに様々な気付きがあり、大きな収穫が得られた。また、お互いの国への興味や想いを共有することも出来た。以下では、本テーマに限らずに、今回の交流で得た貴重な気付きについて記述したい。

中国は米国の貿易保護主義に伴い大きな影響を受けている。中国側としてはまだまだ中国は発展途上国であるので、成熟した国家から学ぶことは多いという主張が多かった。その中で、製品によって日本や米国企業の製品を好んで使っている現状や、ドラマや芸能などの面のコンテンツでは韓国、日本、米国から入ってくるものが多いという興味深い話も出た。他国を立てる主張も多い中、超大国の一国となった今も、発展途上国と先進国の立場を使い分ける中国側の巧妙な立場を透けて見ることも出来た。中国に対する米国の警戒は解けないという意見もあったが、世界的な企業のどの企業も中国を軽視することは出来ず、それは昨今の米国企業の振る舞いにも現れているように思われる。

日本は歴史的に米国と近い立場だが、中国とは地理的に近く、経済・政治的にも重要な関係にある。そのため、昨今の米中貿易戦争の間でいかに振る舞うべきか難しい側面もあると思われるが、日本では高齢化社会が益々進み、国内市場が縮小していく中で、外向きの思考で今まで以上に他国との貿易や交流を重視すべきだと思われる。その中でTPP11に代表されるように自由貿易圏の拡大に努める現状があり、この点は中国側も重視している。外交努力を積み上げ、国内産業を更に振興するのは勿論、未だに健在な「Made in Japan」ブランドを磨き上げ、どんどん外に打って出ていくことが大切であるとの結論に達した。そして日本への好感度を大切にして輸出の一部として観光が大切との意見も出た。

中国の成熟と共に、日本人の対中感情も改善傾向にあり、今回のような交流を機に私達の個人レベルでの積極的な情報発信も、中国に対する日本人の誤解を解くのに貢献出来ると思われる。貿易保護は世界的に見ても望ましくなく、日中間は勿論、国益に注意しつつ他国とも積極的に自由貿易を推し進めていくことが重要であるとの結論に達することが出来た。

総じて、非常に活発な意見交換と親密な交流が出来て、日中双方間の理解が深まったと思う。



意見交換の概要

日 時	11月8日 10:00～12:00
場 所	杭州 浙江工業大学
参 加 者	日本青年 23名、中国青年 21名
スケジュール	意見交換80分、移動・休憩10分、成果発表会30分

分科会の概要

テ ー マ	キャッシュレス社会①
ト ピ ッ ク	日本と中国それぞれの主なキャッシュレス決済方法
参 加 者	日本青年 6名、中国青年 4名

成 果

1. 中国での現状

- 現金を所持している学生は少なく、大半がキャッシュレス決済を利用している。
- 現在のキャッシュレス決済の代表格はスマートフォン決済と社会保障市民カードを利用した支払いである。
- スマートフォン決済と社会保障市民カードを使い分けている国民が存在する。
- クレジットカードや交通系ICカードの類は普及があまり進まなかった。
- スマートフォン決済は便利ではあるが、様々な問題点が残っている。
 - ・スマートフォン自体が使用できなくなると支払いができない。
 - ・高齢者が使用しにくい。
 - ・外国人向けの対応がまだ行われていない。
- キャッシュレス推進に対して政府が意欲的である。

2. 日本での現状

- クレジットカードの導入及び国民への浸透が比較的早かった。
- クレジットカードだけではなく、交通系ICカードの利用率も高い。
 - ・子供からお年寄りまで誰でも簡単に利用できる。
 - ・チャージ式であるため、過度な使用額にならない。
 - ・利用可能店舗が多い。
- クレジットカード及び交通系ICカードへの信頼度が高いため、スマートフォン決済がなかなか浸透しない。
 - ・一方で、生活圏内にそれらを使用するための設備が整っていない場合があり、どちらも持たない国民もいる。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- 中国のスマートフォン決済は訪中外国人が使用できないため、観光という面において収益が出にくいのではないかな。
- 交通系ICカードをはじめとする日本の電子マネーは子供からお年寄りまで安心して使うことが出来る決済方法である。
- 日本では「中国のキャッシュレス＝スマートフォン決済」という印象が強いが、現在はそれに加えて社会保障市民カードという支払方法が存在している。
- 日本が想像している以上に中国人は現金を所持しておらず、スマートフォンによる決済で生活をしているのだが、唐突にそれが使えなくなってしまった経験を誰しも一度はしている。
- 中国のキャッシュレス決済は地域差がないのに対し、日本は地域によって利用できない決済方法が存在するため、その差をなくす必要がある。
- 日中両者が持つキャッシュレス決済の利点をうまく掛け合わせた支払方法を確立するとさらに良いのではないかな。

キャッシュレス社会グループ感想

私たちは浙江工業大学において「キャッシュレス社会」というテーマのもと、日本青年6名、中国青年4名の計10名で意見交換会を行った。小テーマは現在の主なキャッシュレス決済方法についてとなった。想定していたよりも時間は短かったが通訳の方を通して行ったこともあり、両者の考えを明確に伝えることが出来たものとなった。

最初は日本の交通系ICカードについて詳しく話をした。これについて中国青年は交通系ICカードがなぜそれほどまでに信頼され、利用されているのかと興味を持ってくれた。話を進めていくうちにこれは両国が抱える少子高齢化問題に対応できる決済方法であると認識することができた。現在の日本ではとにかくキャッシュレスを進めよう、新たな決済方法としてスマートフォン決済（以下、スマホ決済）を推進しようといった動きが強くみられるが、既に存在しているものでも少子高齢化問題に対応できるという事実気づけたことで、交通系ICカードの新たな一面を見つけることができた。新たなものをつくることももちろん大切なのだが、新しい可能性を見出すことも大切なのだと学んだ。

次に中国のキャッシュレス決済について話をした。そこでは私たち日本人があまり聞きなれない社会保障市民カードという新たな決済方法について聞くことが出来た。スマホ決済推進によりやがて漕ぎ出せた日本と既に次の段階へ進んでいる中国。このように急速に変化する中国の現状を知るためには今回のように現地の人からこまめに情報を得ることが大切であると感じた。また、急速な変化はあるもののこれが国内規模にとどまりがちなのも中国の一つの特徴であると感じた。

最後は世界のキャッシュレス決済について話をしたのだが、この話題が出たとき日中のキャッシュレスばかりを見ていた自らの視野の狭さを痛感した。同年代の彼らは中国という国の枠組みに縛られず世界を見ている。世界における中国の現状と未来を見ている。キャッシュレス社会というテーマではあったが、その意識の差に驚きを隠せなかった。

今回の意見交換会を通して、両国それぞれの現状及び展望を知ることが出来た。また、同世代の青年同士で意見交換をするからこそ感じる刺激も多く得ることが出来た。活発なコミュニケーションにより、青年同士の仲も深まったように感じられるとても意義のある時間となった。



分科会の概要

テ ー マ	キャッシュレス社会②
ト ピ ッ ク	日本と中国におけるキャッシュレスの現状について
参 加 者	日本青年 5名、中国青年 4名

成 果

1. 中国での現状

- ・学生はほとんど現金を持ち歩いていない。クレジットカードは持たずにスマホ決済を利用する人がほとんどである。
- ・スマホ決済が普及している理由として、中国はネットも金融も同時に発達・普及したことと、広大なため、遠隔での操作が必要な時、オンラインでの取引は便利であったことが挙げられる。
- ・高齢者は現金で支払う人も多い。西部の田舎では現金しか使えないところも多い。
- ・スマホ決済には、割引や春節におけるお年玉プレゼントなどの優遇があるため、スマホ決済を利用したいと思う高齢者も多く、モバイル決済を学ぶ方も多い。
- ・中国青年によると、キャッシュレス決済は480億回で、世界で第3位であった。また、成長率は世界第2位で、クレジットカードや小切手ではなく、スマホが一番多い。沿岸部におけるキャッシュレスの普及率は90～95%である。
- ・プライバシーに対する不安もなくはないが、銀行に紐づけされており、またAlipayやWeChatPayは大企業のため、そこまでの不安はなく、利便性の方を重視する。
- ・スマホ決済はあくまで支払い方法の1つの選択肢であり、使いたい人が使えばいい、個人の自由であるという考え方。強制的に普及させるものでもないし、あくまで生活を便利にするものの1つである。
- ・高齢者や子供の利用はおすすめしないという考えもある。理由は、高齢者はスマホに慣れていないため、誤作動があるかもしれない。また、子供は、金銭感覚がないので、高額なものを買う可能性があるからである。
- ・具体的に起こった事件の例として、高齢者にリンクが送られ、架空請求された。子供が生放送のオンラインショッピングで数万元の物を購入したというものがある。
- ・スマホがうまく機能しなくて、スマホ決済ができなかったというトラブルはみんなに起きたことがあった。
- ・バスや地下鉄、さらには電気代やガス代の支払いもスマホ決済でできる。
- ・中国ではWeChatPayが普及する前にWeChat自体が普及していたため、AlipayとWeChatPayの2大会社の地位が確立されている。

2. 日本での現状

- ・日本はネットより先に金融が発達したためクレジットカードが先に普及して、そこからスマホ決済に移る人が少ない。
- ・日本におけるキャッシュレスの普及率は、2016年では19.9%であった。日本政府はキャッシュレスを普及させたいと考えており、2025年までに40%の普及率を目指している。普及促進のため、スマホ決済をすると安く、ポイントが付くなどのインセンティブを付けている。
- ・日本ではクレジットカード決済の人が多いが、金額によってスマホ決済、現金、クレジットカードを使い分けている人もいる。
- ・日本における問題は、アプリが多すぎることで、プライバシーに対する抵抗があることだ。日本では、お店ごとに使えるスマホ決済の種類が決まっていて、小さい会社が乱立していて、まだ競争している段階である。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- ・クレジットカードもスマホ決済もプライバシーに対するリスクは変わらないのではないかと指摘から、キャッシュレス社会という新たな環境に対する無意識の抵抗があるかもしれないと思った。
- ・国民性の違いで、日本人は慎重な考えがあるため情報管理を気にする。しかし、中国人は新しいことやお得なことへの追求心が強く、チャレンジすることを恐れない。国民性の違いが経済発展にも影響を与えていると感じた。
- ・決済方法は自分自身の選択であるから、キャッシュレス社会を無理に推し進めようという気持ちは中国の学生の中にもない。日本と中国は経済や社会の発展の仕方が違うから、今の状況が違うのは当たり前。追う、追われるのではなく、それぞれにあった形で発展していくべき。

- ・全員スマホ決済でトラブルに遭った経験があることが衝撃的だった。
- ・世界規模でキャッシュレスが発展していることに改めて気づかされた。またPayPayはAliPayのデータを分析しながら効率よく普及させようとしていると感じた。
- ・キャッシュレスに関しては、進んでいるということではなく、経済発展の仕方やタイミングが要因であると思った。

分科会ごとの感想文

キャッシュレス社会グループ感想

私たちは日本人5人、浙江工業大学の学生4人とキャッシュレスについての意見交換を行った。浙江工業大学の学生は大学院生が多く、また通訳の方についていただいたため、中国におけるキャッシュレスについて深く理解することができ、大変有意義な意見交換会となった。

まず、日本の現状を説明した後、中国の現状を説明してもらい、その後双方に質問し合うという流れであった。

日本では、現金を使う人が多く、またキャッシュレスの手段としてはクレジットカードが主流である。

一方中国では、大学、鉄道、バス、食事、スーパーほぼ全ての場所でスマホ決済ができ、現金はほとんど持たない生活を送っている。実際に、浙江工業大学の周辺は地下鉄もなく、市街地から遠いため、食事のデリバリーの利用が多い。中国側の学生は全員クレジットカードを持っておらず、タクシーも電車も光熱費もスマホ支払いで済むと言っていた。

プライバシーの心配等はあるが、その代償によって割引などの優遇があれば、そちらの方が魅力的なのでそちらを使うと聞いて、割引や得なことの選択をする考えが日本人の慎重さと違うと感じた。銀行と繋がっており、利用しているAlipayやWeChatPayは大企業のため、大きく損はしないだろうと考えている。若い人はどんどん使用しているが、年配層は操作が煩雑で使用しない人が多いことに関して、キャッシュレスを利用するかどうかは各自の選択だから気にする必要はないとの発言を受けて、中国では完全なキャッシュレス社会を目指しているというイメージがあったが、中国の学生がキャッシュレス決済は一つの方法であり、現金を含めて自分に合った方法を選択していくべきであると言っていたのが印象的だった。

また、日本と中国では社会が発達した時期やその過程が異なるから、現在のキャッシュレス決済に関する社会の状況も異なるのだという気づきを得ることもできた。日本は日本に合った形でキャッシュレス社会を目指していくのがいいのではないかと考えさせられた。今まで日本はキャッシュレスが進んでないので、遅れていると思っていたが、そうではないというのが新たな気づきであった。



分科会の概要

テ ー マ	青年の就業・起業①
ト ピ ッ ク	両国における青年の就業
参 加 者	日本青年 6名、中国青年 6名

成 果

1. 中国での現状

中国では就職活動において学歴や能力が重視されるため、大学卒業後すぐに就職せず、大学院進学や公務員の勉強をしながら就職を目指す人が多い。しかし、今回の意見交換では企業への就職活動を意識する学生が多く見られた。特にアリババ等の大手IT企業を望む人が多くいる。話を聞くと中国人は高給や名誉を重視し、両親が子どもを大企業や有名IT企業に就職させることにステータスを感じていると語ってくれた。しかし、IT企業の中には、「996」と揶揄されるように、朝9時から夜9時まで6日間の勤務をするという現状もある。それによって過労死数ランキングは世界1位となっている。

転職に関しては、中国は日本よりも盛んである。意見交換の中で中国側のある団員は、頻繁な転職が中国の企業に悪い影響を与えており、転職の回数によって信用度を減らすような取り組みを始めて行き、転職のしすぎを抑えようと考えていると話さほどだった。

2. 日本での現状

日本では大学を卒業した後に大学院進学より就業が重視されやすい。「平成29年3月大学（学部）卒業後の状況では、卒業者約57万人中、大学院等7万人」となっており、進学者は少ない。それは大学卒業時点での社会的価値が高く、就業する場合も多くの企業で大学新卒者を中心に採用活動が行われ、大学院進学までいかななくても評価されやすいことがあげられた。

就職において価値観の合致を重視する日本では、じっくりと時間をかけた採用活動が行われ資格やスキルなどは重視されないことが多い。また転職については新卒採用時と違い、資格や実績を重視されるが、前の職場で働いていた期間や転職の回数などもみられ、転職しすぎると良くないイメージが定着しているためあまり盛んではない。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

中国はイノベーションが盛んといえど、やはり就業が中心であり、安定職と思われている公務員も根強い人気があると知り、安定志向は日本と似ていると感じた。しかし、中国の就職活動は受けるまでに求められる能力や転職への考え方などに相違が見られ、日本人就活生とはやり方であったり、そもそも価値観が違っていたりした。

日本と中国を比べると、日本における就職活動は非常に人物重視であり、じっくりと時間をかけて就職活動に打ち込む必要があると感じた。一方、能力重視で社会的地位を勝ち取ることができる中国は、非常にスピーディーであり、どこにいても資格などを持っているかなどの能力が重要視されている気がした。今まで習得したスキルで比べ合うという熾烈な環境が今の中国を作ったのだと学んだ。

青年の就業・起業グループ感想

私たちのグループは、「青年の就業・起業」をテーマに意見交換を行った。まず、日本側から就業の現状についてテーマを絞り質問を行い、その後就業を中心に中国側の質問を受け、相違点・共通点をあげながら意見交換を進めた。

意見交換のなかで印象に残ったことが二つある。一つ目は中国ではイノベーションが盛んと言えど、やはり就業が中心であり、安定職と思われている公務員も根強い人気があるということだ。中国では政府が「大衆創業、万衆創新（大衆による起業、万人によるイノベーション）」の「双创」を推進しており、起業を目指す青年やインキュベーションをする施設が多い。一方で中国では、就職において学歴や能力が重視されるため、大学卒業後に大学院進学を目指すことや公務員就職に向けて数年勉強を行うことが当たり前になっている。

二つ目は中国では大学卒業後に大学院進学や公務員就職を目指す学生が多いが、今回の意見交換では企業への就職活動を意識する学生も多く見られたことだ。特にアリババ等の大手IT企業を望む人が多くいる。話を聞くと中国人は高給や名誉を重視し、両親が子どもを大企業や有名IT企業に就職させることにステータスを感じていると語ってくれた。

この意見交換を通して、お互いの国における青年の就業・起業についてだけでなく、青年を取り巻く社会の情勢への理解を深めることができ、とても有意義な時間となった。日本と中国を比べると、中国の就職活動は日本と同じく新卒採用中心であるが、日本人就活生とは価値観であったり、社会で求められる能力が違っていたりしていたので興味深かった。人口が多く、競争力が高い市場で勝ち残るために必要な物事を考えさせられる時間であった。

意見交換自体については、中国語や英語、日本語などあらゆる言葉が飛び交っており、総じて「知りたい」「伝えたい」という意識から生まれた行動であったことは印象的だった。この姿勢は共通して見習うべきことだと実感した。



分科会の概要

テ ー マ	青年の就業・起業②
ト ピ ッ ク	日本と中国の青年の差異
参 加 者	日本青年 6名、中国青年 7名
成 果	
1. 中国での現状 ・ 起業したいという気持ちを持つ若者は多い ・ 就職を選ぶ若者も多い ・ 大企業も多く、就職も起業もどちらも良い選択である ・ 人脈・資金・アイデアなどが整わず、卒業後すぐに起業は難しい点もある ・ 古いものからの脱却を目指すという視点が強い ・ 市場の変化が激しく、起業のチャンスが多くある ・ 起業に対する国や自治体からのサポートが手厚い ・ 起業にまつわるリスクが少なくなるような支援が多い ・ 大学生時代に起業にまつわるワークショップ、講義、コンテストなどが数多くある 2. 日本での現状 ・ 卒後すぐに起業を選択する人は少ない ・ 起業に対する支援が少ない ・ 起業に対して学習出来る機会が得難い ・ リスクを冒してまでやりたいことがある人は少ない ・ 就職による待遇が良い ・ 起業は難しいというイメージが強い ・ 自分の専門と異なる分野の企業に就職する人も多い ・ 人脈・資金・アイデアがなく起業出来ない 3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと 日本側が考えていたほど、中国の大学生も卒後起業という選択肢を取る人が多いというわけではないと感じた。しかし、中国で特徴的なのは、大学時代に起業に関する授業、ワークショップ、コンテストなどが非常に多い点である。卒業時には人脈・資金・アイデアのいずれかが足りていなくても、就職した後で、自分がやりたいことが明確化した時に起業を選択することが可能なだけのいくつかの要因がある。それには国や自治体の支援、起業のやり方の知識、社会での起業というものに対するイメージ、起業で得られるリターンなどが挙げられる。 総じて、日本に比べて、起業に対する環境が整っていることが感じられた。日本側でも国でも特定の地域でも起業に関する支援や教育の取り組みはいくつも動き始めており、中国側の良い点などは参考にしながら、更に推し進めていけると良いのではないかと感じた。	

青年の就業・起業グループ感想

中国青年7名、日本青年6名で「青年の就業・起業」に関する意見交換会を行った。短い時間ではあったが、一人一人の卒後の進路の取り方も交えながら議論は進み、また想像していた現状とは少し違った現状についても知ることが出来た。会場も素晴らしい場所を用意していただき、通訳の方もおり、ストレスなく議論を進めることが出来ると同時に、中国側の意気込みなども伝わり、気が引き締まるように感じた。

中国側の意見では、私達が想像していた現状とは異なり、必ずしも起業ばかりが望ましいとされているわけではなく、中国青年も就職を選ぶことも多いということは驚きであった。しかし、中国では起業に関する授業やコンテストが日常的に行われている様子で、起業がとても身近に感じられる環境があり、また政府の支援が非常に手厚いということから、起業に関するハードルやリスクが低くなっていた。そのため、就職を選んでも将来的に準備が出来たら起業を選択したいという学生は多かった。

日本側ではやはり就職を選ぶ学生が多いと感じたが、起業に対する関心は皆が抱いており、起業に対するリスクやハードルが非常に高いということから、関心を実行に移しにくい現状が浮き彫りになったように思われる。日本では就職による給料や待遇が良く、わざわざ起業を選択する理由が少ないということも一つの理由だと思われる。ただ実際に海の家を作り、ゲストハウスを作ることに興味のある日本青年もあり、コミュニティに実際に起業を実行している仲間がいることによる刺激は計り知れないものだと感じた。

総じて、日本と中国の間で青年の就業・起業に関する現状は大きく異なっているというわけではないという印象で、日本でもこれから迅速に制度や大学の教育が変化すれば、起業という選択肢を取る学生も増えてくるのではないかと前向きな視点も得ることが出来た。

交流の最後に、他のグループを交えて全員の前で代表者が自分達の意見交換会の内容をまとめて発表する場があったが、このような場が非常に中国では多いと感じた。こうした多くの人の前でしっかりと場を整えて話をするという中国の文化は責任感や自尊心、引いてはリーダーシップも育むもののように感じ、私達には極めて目新しく映ったということも付け加えておきたい。

